

月曜日のたわわ～幼馴染
染はとともたわわです
～

とちおとめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイちゃんが可愛すぎて書いた。後悔はしてないし反省もない。

短編のようなものとしてお楽しみください。

さあたわわ好きよこの指止まれ！

というか月曜日のたわわを知ってる人どれくらいいるんだろうか？笑

ユー君視点ではない番外編除き、全10話で完結予定。

目次

1 たわわ！	1
2 たわわ！	8
3 たわわ！	16
4 たわわ！	25
5 たわわ！	34
6 たわわ！	41
7 たわわ！	50
7・5 たわわ！	59
聖夜のたわわ！	68
8 たわわ！	75
9 たわわ！	84

おわりのたわわ！	96
番外編	
アイちゃんと身体測定	106
アイちゃんとお正月	114
妹ちゃんから見たお兄ちゃん	123
アイちゃんと昼休み、そして……	131
アイちゃんと盛大な夢落ち	139
本編とは関係のない話 双子編	148
先輩と後輩ちゃんは歩き出す	155
アイちゃんと買い物	165
すまん♡	175

1 たわわ！

突然だが、空から女の子が降ってくると思うだろうか。

漫画やアニメではありきたりなこの展開だが、現実で起こることなんてそうそうあることではない。確実に起きないと言えるわけではないが、ぶっちゃけ空から女の子が降ってくる…それが現実で起きるものならそれは事件である。

更に言うならその落ちて来た女の子がナイスボディで、受け止める側の男の顔にその豊満なお胸様がダイブするようなラッキースケベ的展開も現実では起こるはずがないのだ……と、少し前までの俺は思っていた。

「いったたた……はっ!? 大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……大丈夫だよ……色々とクツシヨンになったのかな？ あはは……」

目の前で繰り広げられる現実、それは豊満な胸を持つ美少女が階段を踏み外して落下し、それを下にいた会社に向かおうとしていた男性が受け止めると言うもの……漫画よろしく美少女の豊満な胸を顔面で受け止めてだ。

まさかあり得ないと言ったその瞬間にこのような場面に出くわすとは思わなかった。最初は呆然としていた俺だったが次には吹き出していった。いきなり笑い声が響いたた

めか件の2人の視線はお腹を抱えて笑う俺へと向かう。

いやあ悪い悪い、でも許して欲しい。

月曜日の朝からこんなものを目撃できるとは思わなかったんだ。笑う俺を見て出勤途中の男性、《お兄さん》と呼ばせてもらおうか。お兄さんは先ほどの胸の感触を覚えているのか顔を赤くして頭を掻き、もう1人の豊満なお胸様を持つ女の子は少しだけ頬を染めながら口を開いた。

「もうユー君笑い過ぎ！ そんなに笑わなくてもいいでしょ！」

そんな風に声を荒げる幼馴染、アイにすまんすまんと謝りながら俺は2人の傍に駆け寄った。

これから語られるのはなんてことはない。

ユーと呼ばれた俺、幼馴染のアイ、そして会社通いのお兄さん、その他多くの人によって描かれるただの日常風景である。

漫画のようなハプニングが起きてから、俺たち3人は揃って電車に乗っていた。

俺とアイは同じ学校に毎朝電車に乗って通っている。今となっては慣れたものだが、

流石都会と言えるのか朝は学生もそうだが通勤する社会人が本当に多い。毎朝毎朝が席の取り合い奪い合い、そうでないものはつり革に掴まったり壁際に陣と取ったりなど……うん、本当に大変だ。

俺やアイは電車に乗るのは遅い方なので大概壁際に2人揃っている。当たり前のことだがアイが窓際、その理由と言うのが単純に痴漢対策である。幼馴染と言う鼻屑目を抜きにしてもアイは美人だ。愛らしい表情もそうだが何より、異性の目を惹きつけて離さないのが彼女の持つ豊満な胸にある。

「……今日もいっぱいだね」

「まあ仕方ないよなこればかりは……」

それなりにギユウギユウ詰めされているせいかアイの声がすぐに届く。オマケと言ってはなんだが俺の胸に押し当てられる彼女の胸が潰されむにゆりと形を変えていた。

正直この状態は男である俺にとっては拷問のように思えないこともないがかなりの役得である。だって俺も男だもの、更に言えば巨乳が大好きな今時の男子高校生なのだ。アイには言っていない、言えるはずもないのだがこの直に伝わる柔らかい感触は1つの癒し。月曜が始まりました1週間学校が始まってしまうと憂鬱になる俺を癒してくれる奇跡の一瞬だ。

「…………えへへ」

アイは小さく微笑みながら少しばかり体重を預けてくる。

幼馴染としてずっと一緒だったのもあるのかアイは結構スキンシップが多い。勿論他の知り合いにこのような無防備な姿を見せることはないようだが、そう考えると少しだけ俺はアイと幼馴染であり最も近い距離にいることがとてつもなく嬉しく思うことがある。

まあこう思うのも一重に、俺がアイのことを少なからず想っているのもあるのだろう。

「2人は本当に仲が良いんだね」

そうこうしていると俺の傍にいたお兄さんがそう言ってきた。

「幼馴染ですし」

「幼馴染ですから」

狙ったわけでもないのに俺とアイの声が揃った。思わずに互いに見合わせ小さく吹き出す。お兄さんもそれを見て優しく笑っていた。

それから電車が駅に着くまで俺たちとお兄さんは語り合った。

俺たちが抱える学校の愚痴を言えば、お返しにお兄さんからも会社の愚痴が帰ってくる。正直俺はまだ学生なので仕事の大変さなどは明確に伝わりはしなかったものの、い

ずれ迎えるであろう社会人の時を考えれば、お兄さんの話は新鮮でありとても楽しかった。……お兄さんが語る社畜云々の話はともかくとしてではあるが。

それから俺たちはそれぞれ目的の駅に着き別れる前にこれも何かの縁だと3人でアドレスを交換しいつでも連絡が取れるようになった。

「お兄さん良い人だったね」

「そうだなあ、ゲーム好きに悪い人はいない」

「あはは……途中から盛り上がったね」

アドレス交換の際にふとお兄さんのスマホに目が行った時、そこには俺も今ハマっているアプリがインストールされていたんだ。そこから互いにゲームについての話になり、アイには悪かったがあそこは趣味を優先させてもらった。いやあいい時間だった。今夜にでも次に始まるイベントについて大いに語り明かしたいところである。

ゲーム好きに悪い人はいない、ゲームは人と人を繋げるんだなど改めて実感した瞬間である。

そんな風にお兄さんとのやりとりを思い出していた時、アイがふと声をかけてきた。

「そうだユー君、今日放課後暇かな？」

そう問いかけられ考えてみるがこれと一つ用事はない。

そう返すとアイはホッとしたように続けた。

「それじゃあ買物に付き合ってくれないかな?」

買物の誘いか、別に断る理由もないので頷いておく。

たったそれだけのことなのにアイは嬉しそうに俺の腕に抱きついてきた。アイの持つ凶悪な2つの胸の間に腕が挟まれ、何とも言えない幸福な気持ちになる。

「買物って何を買いに?」

「まあお母さんに頼まれた夕食の買い出しもあるんだけど……えつとね、その……」

いきなりモジモジしたアイに首を傾げる。

アイは頬を真っ赤に染めて、上目遣いに口を開いた。

「また少し……大きくなっちゃったみたいで……今も少しキツイの」

あ……(察し)

何が大きくなって何がキツイのか、アイの幼馴染をやっていてこれに気づかない奴に幼馴染の資格はない。キリツと言ったが別に胸を張れることでもなかったか……。それにしても……ふむ。

俺はチラッと視線をアイの胸へと向けた。

この凶悪とも言える大きさの胸はまだ成長しているというのか……。

邪な気持ちで頭を振ることで振り払い、表情に出ないようにそうかと短く返事をして通学を再開した。

それにしても普通は女子とかを誘うのではないのだろうかこういうのは……バレエ部ちゃんとかは喜んでついて来そうではあるが。まあ何にしても可愛い幼馴染の頼みだし付き合おうとしようか。

「……ユ一君だから頼めるんだよ？ 大切な幼馴染だし……その……ううん！ 何でもない！」

途中で言葉をやめるも決して腕は離さないアイ。

そんなアイが可愛すぎて俺は心の中でこう呟くのはお約束である。

幼馴染が可愛すぎて生きるのが辛い。

今更か、そんな声が聞こえた気がするが気にしない。

今日も今日とて幼馴染と一緒に過ごす1日が始まる。

2たわわ!

今朝の愉快的な出来事を終え、アイと放課後に出かける約束をした後の話である。

あれから特に何かハプニングはなく俺とアイは学校に着いた。下駄箱で靴を脱ぎ上履きを履こうとした丁度その時、俺のスマホが震えた。

何だろうと思いつまほを手にとり見ると、姉さんからlineにメッセージが入っていた。

唐突になつてしまふが今俺は姉と一緒に住んでいる。毎日朝早くから仕事に出て帰ってくるのも遅い姉はあるが、いつも弁当を作ってくれる優しい姉でとても大好きである。……意外と完璧な姉に見えるが唯一の欠点はその酒癖の悪さだ。少しばかり天然な性格ではあるがそこは姉の可愛さというやつ、だが酒癖でめえはダメだ。

酒に酔つて帰ってくる姉はとにかく絡み上戸というやつになる。アイに勝るとも劣らない大きさ且つ弾力があり柔らかい胸を押し付けられる感覚は何度も言うが役得ではあるのだが、相手は血の繋がりがあつた姉だ。そんな相手に欲情でもしようものなら俺は社会的に死ぬ確実に。

まあそんな姉ではあるが良き姉であることに変わりはないため、早く結婚して幸せに

なってほしいという気持ちはいつも持っている。願わくば酒癖の悪い姉のストッパーとなり、いつも家まで送り届けてくれる人——姉の会社の先輩さんに個人的には頑張ってもらいたいものだ。きつと姉も先輩さんと一緒にいるのは満更ではないはずだしな。

「さてさて何々」

姉から送られてきたメッセージは大方予想通りのものだった。

『お姉ちゃん今日は会社の飲み会で遅くなります。ごめんねユー君。ご飯は作るか外で食べてきてね』

大体こんな時間に姉からメッセージが入るのは飲み会の報告だ。

ということとはまた先輩さんが姉を送ってくれるのだろう。いつもありがとうごさいます先輩さん、もしよろしければ姉をもらってあげてください。

一言分かったと返信を返し上履きを履く。

スマホを見ていた俺を待っていたのかアイが傍に来た。

「どうしたの？」

「うんにゃ、姉さんが飲み会で遅くなるからってさ」

「ああなるほど」

ちなみにアイと姉は顔見知りである。

幼馴染ということもありアイが家に来ることも珍しくはないため顔を合わせる頻度

も少なくない。おまけに二人して話が合うのかそれなりに関係は良好のようだ。

そんな風にアイと並んで教室に歩く。

おはようと言いながら二人して中に入れば、みんながおはようと返してくれる朝の光景。

俺は自分の席である窓際に向かいカバンを掛けて席に着く。アイは俺の隣なので同じように席に着くと……そんなアイの背後から忍び寄る魔の手があった。ゆっくり、ゆっくりと忍び寄ってくるそれを目にした俺はアイに声を掛けようとしたのだが、残念無念あと少し足りなかった。

「おっはよう!!」

「わひゃっ!?!」

完全に無防備だったアイ、そんな彼女の脇の下から腕が伸びてその先の手はアイの胸へと向かう。

豊満な両胸をこれでもかと揉み回すのはバレエ部ちゃん。俺とアイにとって入学時から続く腐れ縁の彼女だ。アイは必死にバレエ部ちゃんの拘束から逃れようとするが流石は運動部、力が強いのかアイは簡単に抜け出すことができない。段々と息が荒くなつたアイがエロい……ゲフンゲフン、辛そうになつてきたので俺はアイからバレエ部ちゃんを引き?がした。

「まだ私は満足できてないんだけどな〜?」

「知らねえよ。つうかいきなり人の胸を揉むやつがあるか」

「それでも私は胸を揉む。なぜならそこに大きなおっぱいがあるのだから!」
「胸張つて言うことじゃねえ!!」

その気持ちは大いに共感できるが時と場所を考えないかこのエロ女子は。

というかそんなに揉みたければ自分のを揉め。お前も平均以上にはあるだろ!

「いや、自分の胸を揉んで欲情したらそれこそやばいと思う」

「……確かにな」

「納得しないでよユー君!」

至極真面目に返されたから思わず同意してしまった。

バレエ部ちゃんではでしょ?とウインクをした後アイに抱き着いた。

「むふふ。今日も旦那と登校とはアツアツですなあ」

「ちよつと変なこと言わないでつてば!!」

「おや? その反応は彼のことはどうでもいいということでは?」

「ち、違う! ユー君のことはだいです……つてもういい加減にしなさい!!」

言いかけた言葉を引っ込めて今度は自分の力でバレエ部ちゃんを振り払った。

アイは顔を赤くしながらふうふうと息を吐きながらキリツとバレエ部ちゃんを睨み

つける。しかしそんなアイの睨みは大して効いていないのかバレエ部ちゃんはニヤニヤしっぱなしである。それもそのはずで、美少女が涙目で睨んでも怖いわけがない。

「可愛い」

「可愛い」

「うん？」

「お？」

「……………」

「……………」

ガシッ!

やはりこいつは分かるやつだった。

俺とバレエ部ちゃんは熱い握手を交わす。いきなり視線を交差させながら握手をしだした俺とバレエ部ちゃんを見て、周りにいたクラスメイトはうんうんと頷く。唯一気づかないのはアイだけで、そのアイは俺とバレエ部ちゃんの繋がれた手を見てぷくつと頬を膨らませていた。

「……………むむ、えい！」

「ちよ!?!」

アイが俺の空いた手をいきなり引つ張ったことで体勢がグラツと崩れてしまった。

そんな俺を見てバレエ部ちゃんがニヤリと笑い、何をする気だと警戒した瞬間俺はバレエ部ちゃんにポンと押し出された。見事に体勢が崩されたことでそのまま俺はアイの元へ倒れる。幸いにアイは座っていた椅子がカバーになって後ろに倒れるということとはなかった。そしてそれは俺も一緒に、倒れることはなくアイに受け止められる形となった……なったのだが。

むによん

顔面が素晴らしく柔らかい二つの物体に受け止められたのだ。

弾力があつて柔らかく、そして温かいそれはずっとそこに顔を埋めたいと思わせる不思議な力があるように思えた。

「あ……」

「おお……」

頭のすぐ上から聞こえてきたのは消え入るようなアイの声と、何かを期待するようなバレエ部ちゃんの声。

柔らかさを感じる感覚の中にドクンドクンと変わらず響き続ける音……考えなくても分かる。俺は体勢を崩した拍子に導かれてしまったのだ。アイが持つ理想郷に。

さて、冷静に分析したがこれは拙い状況なのでは……？

いくら親しい間柄とはいえ胸に顔を突っ込んだままというのはダメだろう。俺はす

ぐに顔を離そうとしたのだがまたここで予想外なことが起こる。

「……………っ！」

「……………!!」

ガシツと、頭をそのまま抱え込まれたのだ。

「……………握手してたんだもん、これくらい私だって！」

「おお!!」

「……………!!」

今の俺の状況からアイの表情は見えないが声音からかなりテンパっているのは分かる。混乱してるのは分かるが一体どうしてそこで俺の頭を抱え込む必要があるんですかねアイさん!! 俺としては夢のような話だけど段々呼吸が続かなくなってきたんですか……………!! 　　そしておいバレー部ちゃん! 君は俺たちに何を期待してるんだ!

結局そんなやり取りはそれから数秒続き、林檎と勘違いするくらい真つ赤になったアイと息絶え絶えで青くなった俺、そしてゲラゲラ笑うバレー部ちゃんがそこにはいた。

天国と地獄は紙一重、それは正にこの瞬間を言うのだろうと俺は実感するのだった。

「いやぁいいものみせてもらったよ」

「お前な……………」

「気持ちよかっただろ?」

「……はい」

……俺も男だ。ウソは吐けなかつたよ。

朝礼に現れた先生に何があつたんだと聞かれ、話そうとした男子がバレー部ちゃんにぶたれていた。そんな風にするなら最初からするなど……間違ひなく俺とアイの心は一つになつた瞬間だつた。

3たわわ!

「……はう」

「……やれやれだ」

学校帰りのシヨッピン街、俺の横で顔を真っ赤に染めて歩くアイを見て俺は先ほどの光景を思い出していた。

登校時の約束通り、俺とアイは二人で買い物へと出かけていた。アイのお母さんが頼んでいた夕飯の買い出しを済ませた後、アイが手を引いて向かった先は大手デパートの中に位置する下着売り場だった。

一応下着を買いに行くというアイの意図は理解していたが、男である以上女性の下着売り場に近づくのは正直言って苦行だった。商品を見ていた幅広い年齢層の女性客には最初訝し気に見られたものの、手を繋いでいるアイに視線を向けたらあらまあまああと口に手を当てて微笑ましそうに見られたのだ。まあ俺的にはこいつ変態かみたいな目で見られないことは良かったが、やはりそれでも居心地が悪いことに変わりはないかった。

さて、ではどうして下着売り場に行った帰りの今、アイがこんな風になっているかと

いうとその原因は俺と店員のやり取りにあった。

アイが下着を選んでいる間、手持無沙汰になった俺は少しばかりその場所を離れスマホを弄っていた。

傍にいてねと言われはしたが流石にあの居心地の悪さには耐えられないというやつである。そんな風に離れた場所でスマホを弄っていた時、俺は下着売り場の女性店員に声を掛けられたのだ。

『彼女さんですか？ とても可愛らしい方ですね』

ニツコリと営業スマイルを浮かべる店員さんにそう声を掛けられ、俺はまだ付き合っていないと苦笑しながら答え幼馴染なのだと言った。店員さんはまだの部分が引つ掛かったのか興味深げにしていたが、特に訂正する必要もなかったのものでそのまま。

それからしばらく会話をしていたが話題はいつの間にかアイにどんな下着が合うのかというものになっていた。

『あの子は可愛らしくもありスタイルもいい……ふむ、この下着とか似合いそうですね』『エロいですね……でも俺的にアイは清楚な感じの方が似合うと思うんですよ。これとか良さそうかな』

『いいですね……ふふ、彼女のことよく見ておられるんですね』

『まあずっと一緒でしたからね』

店員さんと笑顔を交えての会話は思いの外捗って、俺は場所を忘れてアイのことを考えながら口を動かしていた。思えばこの時に気づくべきだったのだ。店員さんが一瞬チラリと俺の背後に視線を向けた時、何か企んだかのようにニヤリと笑ったことに。まあ今から考えればそれが後の祭りというやつで、店員さんからの問いかけ。

『あの子のこと、どのように思ってるんですか?』

普段であれば少し考えて言葉を選んでいたであろう俺だったが、店員さんとの会話で気が緩んでいたのか俺はそのまま思うことを口にしていたのだ。

『大切な幼馴染ですよ。少しおつちよこちよいで目を離せないんですけど、それでも時折しっかりと頼りになって……傍にいて心地いい、大好きな子です』

言った傍から恥ずかしくなって頬を掻いたが、俺は気付いてしまったのだ。

店員の企んだような笑みの意味に。店員さんがゆっくり視線を後ろに向けたのを見て、俺もそれに釣られて後ろを振り向くと……うん、いたんだ。手に持った下着で顔を隠し耳まで真っ赤にして俯くアイが。俺はその時やつちまったと悶えると同時に、下着で顔を隠すそのアイの姿がシニールに思えてしまつて恥ずかしがればいいのか笑えばいいのかよく分からない気持ちになつてしまった。

『えつと……終わつた?』

『う、ううん……あと一着くらい買おうかなって思ってるけど……』

『そうか……』

『うん……』

下着売り場で互いに挙動不審になる俺とアイの姿は他の客にどのようなように映ったのだろうか、正直あまり考えたくないものである。結局その後アイは最後の一着を決めるために下着を見始めるのだが。

『彼、これを見てあなたに合うって言っていましたよ?』

『買います!』

こんな会話が あつたのも、俺の耳には届いていたが聞こえないふりをしておいた。

とまあそんな経緯があつて今のトマトのようなアイが傍に居るといふわけだ。ただ流石は長年培ってきた幼馴染としての時間があるのか会話がないとかそんなことはない。照れながらもアイは話をくれるし俺が振る話にもこたえてくれる……それでもデートパートでのことを考えると頬に熱が集まるのは当然だが。

一緒に並んで向かう先はアイの家。

今日姉さんは飲み会で帰りが遅くなるため夕飯をどうしようかと思つていたところ、それなら食べに来てとアイに誘われたため向かっているのだ。

お互い片手に買い物袋を持つ暗くなった道、空いていた右手が温かい何かに包まれ

た。

考えるまでもない、傍に居るのはアイだけだ。ならこの包まれた物の正体は手、それができるのは隣を歩くアイだけ。

「…………えへへ」

照れくさそうにはにかむアイの横顔に心臓がドキリと脈打つ。

心臓の鼓動が煩い、頬に集まる熱が鬱陶しい、でもこの感覚は嫌ではなかった。だつてこの気持ちは俺がアイを想っている証でもあるから。

「…………待つてほしい、いつか必ずこの気持ちを伝えるから」

ボソツと聞こえないように小さく、本当に小さく呟く。

「うん…………待つてるよ。いつまでも」

小さく呟かれたアイの言葉、それは夜の風に溶けて俺に届くことはなかった。

お互い会話少なめに歩いていっていると少しして目的地であるアイの家へと着いた。最初にアイが玄関を潜り俺もそれに続く。

今でもそれなりに訪れるので懐かしいとかそんな感覚はない。

「おじやましま〜す」

「いらっしやいユ〜君」

すぐ傍で答えてくれたアイと共に慣れたようにリビングへと進んだ。

リビングに入ると見知った顔が一つ、アイを若干幼くした容姿ではあるが立派な胸を持つその女の子——アイの実の妹である。

「あ、ユーさんいらしたんですね」

「おう。アイに飯に誘われてな」

俺の返事を聞いて妹ちゃんはなるほど頷く。

「お母さんは？」

「少しお隣に行ってる。すぐ帰ると思うよ」

「分かった。それじゃあ夕飯の用意しておこうかな。ユー君は座ってていいよ」

「何かやるなら手伝うぞ？」

「大丈夫だよ。今日は御もてなしするんだからユー君は待つててね？」

「……ならいいけど」

何か手伝えるならやろうと思ったが、アイにそう言われてしまっは仕方ない。

キッチンから聞こえそと聞こえる音をBGMに俺は妹ちゃんの隣に腰掛けた。座った俺に妹ちゃんがくっつきながら口を開いた。

「ユーさん最近お姉ちゃんとはどうなんですか？」

「どうって言われても……まあ変わらずつてやつかな」

まあ先ほど妙な決心を決めたところですけどね。

そんな俺の返答を聞いた妹ちゃんは何を思ったのか俺に抱き着いてきた。服越しとは言え伝わる大きな胸の感触が幸福である。毎度毎度思うことだがこの家の女性陣は皆胸が大きくなる魔法でも掛けられているのだろうか、まあ単純にアイすら凌駕するお胸様を持つ母からの遺伝だとは思うが。

「妹ちゃんや」

「なんですす〜?」

「この行動の意味はなんでしようか」

「ふふふ、さあなんでしようね?」

曖昧に答えを濁す妹ちゃんを見て溜息が零れる。

大人しそうな外見だがアイよりも行動力がある妹ちゃん、残念ながら俺にはその真意は理解できない……いや。

「何してるのかな?」

「お姉ちゃん後ろに般若が見えてるよ……ふふ」

人一倍アイが大好きな妹ちゃんのことだ。

怖がるふりをしながらもその口元がニヤリと弧を描いている……単純にからかって楽しんでるだけだこの子。

「お姉ちゃん嫉妬かな?」

「なっ!? そんなことないもん!」

口ではやはり妹ちゃんの方が上か。

でも本気で怒ると妹ちゃんを泣かすくらいアイは怖いんだがな。普段妹ちゃん然りバレエ部ちゃん然り、常に弄られる側に回っているアイからは到底想像はできないことだが。

まあでも、やつぱりこの賑やかさは嫌いじゃない。

俺は一人、うんうんと頷くのだった。

「……ユ一君何頷いてるんだろう」

「さあね。でもお姉ちゃん安心していいよ」

「?」

「ユ一さんはやつぱりお姉ちゃんのこと一番想ってるんだよ。お姉ちゃんを見る目優しいから」

「そ、そうかな……えへへ」

「うわあこれだけでニヤけてるし……まあでも」

「いつでも妹というのは、お姉ちゃんの幸せを願っているものなのです。だからお姉ちゃん、頑張ってね」

4 たわわ！

「……へえ、この芸能人また出てきたのか」

外が暗闇に染まった23時頃、俺は自宅のリビングでテレビを見ながら寛いでいた。

姉さんが帰ってこないためアイの家で夕飯をご馳走になったが……うん、大変美味でございました。アイが最初は作っていたがお母さんも合流して本格的に調理開始。いやああの野菜炒めは最高に美味しかった。

『いつでもアイをもらってくれていいのよ？』

『そうなるとユー兄さん……うん、ユーお兄ちゃん……どれも捨てがたい呼び方だなあ』

毎回俺がアイの家を訪れる度にされるやり取り、それによってアイが小さくなるのは相変わらずだった。

「……………」

それから静かにテレビを見ること数分後、来客を知らせるチャイムが響いた。

この時間帯で客が来ることはまずないので、ほぼ確実に姉が帰ってきたのだと予想ができた。ソファから立ち上がって玄関に向かいドアを開けると、そこにいたのはやっぱり

り姉ともう一人——先輩さんだった。

「やあユー君、こんばんは」

「どうもです先輩さん。毎度毎度姉をありがとうございます」

酒が入って足元が覚束ないのであろう姉を支える先輩さんにお礼を言うと、むうと口を尖らせた姉が口を開いた。

「もうユー君、まるで先輩がいないと私がダメみたいじゃないの〜」

そう言ってるのが分からないのかこの姉は……。

というか相当酔っぱらっているな今日は。顔も赤いし何より酒の匂いが半端じゃない。姉自身も酒に弱いことは自覚しているはずなのだが、一度飲みだしたら止まらぬのはひとえに酒の力なのだろう。こんな姉を見ると将来お酒には気を付けようと考える瞬間だ。

姉の靴を脱がして先輩さんの代わりに抱きとめ、そのままリビングのソファへと運ぶ。

ソファにグツタリと寝そべった姉の表情は天国にいるかのようにだらしなもの、俺や先輩さんがいるにも関わらず無防備だ。

そんな姉の姿を見た俺と先輩さんは二人揃ってため息を吐き、とりあえず先輩さんには座ってもらって冷蔵庫から水を取り出して差し出した。

「ありがとうユ一君」

「いえ、相変わらず大した持て成しもできないですけど」

「こんな夜なんだ。そんな贅沢は言えないし言うつもりもないさ」

そう爽やかに言う先輩さんに自然と笑みが零れる。

姉をここまで連れてきてくれた先輩さんだがどうやらタクシーを待たせているようで、水を飲んだ先輩さんはすぐに帰るように玄関に向かう。姉さんを起こそうとしたが先輩さんがいいと言つて俺だけが見送る形になった。わざわざ先輩に送ってもらった後輩である姉さんが起きないというのに、声を荒げるでもなく姉はそういうものなのだと受け止める理解している先輩さんは本当に優しい人だ。

「それじゃあねユ一君。また今度ご飯でもいこうか、お姉さんも一緒に」

「あはは、ありがとうございます。その時は是非」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい」

そういつて先輩さんはタクシーに乗り帰っていった。

タクシーが見えなくなるまでその場にいた俺は家に戻り、とりあえず姉さんを起こさないといけない。別に寒い時期ではないが流石にリビングで寝て風邪を引かれても困る。

ソファで眠りこける姉さんの肩を揺らすと、寝ぼけてはいるのだろうか薄っすらと目を開けた。

「ほら姉さん起きなよ。ここじゃなくて部屋で寝なつて」

「……………ううん……………お部屋連れてつて」

「……………」

抱いてと言わんばかりに両手を広げる姉さんに二度目の溜息が出た。

まあ仕方ないかと思ひ腕を伸ばして姉さんを抱き上げようとしたその時、いきなりその腕を掴まれ引き寄せられる。咄嗟のことに踏ん張ることができずそのまま姉に追いつ被さる様に倒れこんでしまった。姉の持つ豊満な二つの胸の間に顔が導かれた。

「ふふふん♪ ユー君♪」

「……………ちよつと姉さん?」

「ううん? なくに?」

甘く囁くようにそう言う姉さん、昔のように甘えたい衝動に駆られそうになるが俺ももういい年である。顔から直に伝わる天国の如く柔らかい感触は余すことなく堪能するがそれ以上のことはない。とはいえ酒が入った姉さんが絡み上戸になるといのはこういうことで、こうなった以上満足するまでこうさせておくのが一番手っ取り早い……………決して感触を味わいたいからとかそんなつもりも微塵もない……………ないっただらない。

「大きくなったよねユー君」

「もう高校生だからね」

「うん。もう高校生……もうすぐ大人なんだよね」

優しく頭を撫でられる感覚がくすぐったくも居心地がいい。姉さんの胸元に顔を埋めていることで甘い匂いがする……でもやっぱり酒の匂いが所々で臭うのが全てを台無しにしていると言っても過言ではなかった。

ようやく満足したのか姉さんの拘束が弱まったことで俺は立ち上がり姉さんを抱き上げた。

首の裏に手を回してもらってそのまま向かうのは姉さんの部屋、ベッドに向かい姉さんを優しく下ろす。姉さんは少しだけ目が覚めてしまったのかパツチリとは行かないまでも大きく目を開けて口を開いた。

「ありがとうユー君」

「いいっていいって」

姉さんのお礼を受け取り、俺はそうだと続ける。

「姉さん明日朝辛いようなら弁当とかいいよ？ コンビニで買うからさ」

何だかんだでもう夜も遅い、その上明日弁当を作るのに早く起きてもらうのは申し訳なかった。そう思ったからこそこんなことを言ったのだが、姉さんは笑顔でこう返して

きた。

「そんな心配しないで大丈夫だよ。ユ一君のお弁当を作るのも姉として私の楽しみでもあるんだから」

「……そっか。じゃあいつも通りお願いするよ」

「うん。任せました」

そう言つて姉さんの臉が段々降りてきた。

もうこうして会話するのも辛そうで今すぐにでも眠つてしまいそう。俺は部屋の電気を消して姉さんの部屋を出るのだった。

「おやすみ姉さん」

「おやすみなさいユ一君」

背中に届いた姉さんの声を最後に入り口の扉が閉まった。

点いていたリビングの電気とテレビを消して自室に戻ると、ちょうどベッドの上に置かれていたスマホが着信を知らせていた。

慌てて手に取つて誰からか確認するとアイからだった。

「もしもし?」

『あ、ユ一君寝てたかな?』

姉を待つていたし今から寝る所だったと伝える。

それなら少しだけ話をしようということになった。思えばこうして寝る前にアイから電話が掛かってくることは珍しいことじゃない。どちらかと言えばずっと続いていた日常の一部である。

それから数分だけ他愛もない話をして、お互いにそろそろ寝ようかという時だった。

『そろそろ寝ようかな。ねえユー君、ユー君は寝るときどんなことを考えながら寝る？』
「どんな」と……か」

アイからの問いかけに少し言葉が詰まる。

いきなり唐突な問いかけであったのもあるが少し考えても答えが出てこなかったのもある。というか別に寝る前に考えることがあまりないのだ。気づけば寝て気づけば朝を迎えているものだから。

そう伝えるとアイは小さく笑って、次にこう続けてきた。

『私はね。ユー君のこと考えてるよ。また明日も、ユー君と一緒に楽しく過ごしたいなって』

不意打ちのように耳に響くアイの言葉。

正直くそ照れくさいのだが、ここで言葉に詰まるのもどうだと思った気がした。俺は少しだけアイをびつくりさせようかなと思いきり返すのだった。

「……そっか、じゃあ俺も今日からアイのことを考えながら寝ようかな」

『えっ!? あ、あの……ユー君?』

「今日もアイは可愛かったなあとか、バレエ部ちゃんの絡みは眼福だったなあとか」
『か、かわっ!? とうか眼福!』

「……また今日みたいに、一緒に出掛けて楽しく過ごしたいなってな」

『あ……っ!』

何やら悶える声が聞こえる。

なぜだか枕を抱きしめベッドの上で悶絶するアイの姿がこれでもかと想像できた。

「ははは、まあそろそろ寝ますかね」

『……そうだね。ユー君、おやすみなさい』

「ああ、おやすみアイ」

こんな甘酸っぱい時間のことを青春とでも言うのだろうか。

1日が終わり始まるのはまた別の1日、でも一つだけ分かることは——明日は今日よりも、きつと楽しくて素晴らしい1日だということ。

絶対に来る明日という1日の期待、それを胸に秘めて今日という1日は終わるのだった。

「……………」

『……………』

「切らねえの？」

『ユー君こそ切らないの？』

「……………」

『……………』

「……………はは、それじゃあせくので切るか」

『うん分かった。それじゃあ』

「『せくの！』」

プツッ！

5たわわ!

「俺も君たちみたいなの青春時代を送りたかったなあ」

「……切実ですねお兄さん」

「まだ大丈夫ですよ！ きつといい人が見つかりますよ！」

新たな朝はお兄さんの切ない言葉から始まった。

例によって例の如く満員に近い電車の中、俺とアイ、そして最近知り合ったお兄さんは端っこの方に固まっていた。三人でそれぞれ話題を振りながら会話をしていた中、俺とアイを中心に学校の話になり、お兄さんは学生時代どんな青春を送ったのか気になったアイが質問をしたのだ。

『彼女さんはいたんですかと？』
と。

それに返ってきたお兄さんの返事はいないというものだった。彼女を作ることに関しては社会人になり会社に入ると出会いが多くなりそれに期待していたみたいだが、今は会社の社畜よろしく恋愛なんてする暇もないほどに仕事に追われているらしい。話の中から伝わってくるお兄さんの負のオーラ、気のせいか禍々しい黒い色が見える気が

する。そんなお兄さんの様子を見て俺とアイは二度とこの質問はしてはいけないと誓うのだった。

「部長は怖い人でね、小さなミスもすぐ怒鳴り散らすんだよね。ああでも最近少し丸くなったかな、何があつたのかは知らないけどね」

「ふむふむ、どこかでストレス発散してるんでしようかね」

「さあどうだろうねえ、プライベートまで話すことはあまりしないから」

うーん、やっぱり会社という枠組みに入る以上上司とそういったこともあるのか。

いやはやお兄さんの話は本当に新鮮で楽しい。まあ聞く側で社会人を経験していない学生だからこのような意見を持つのだろうけど、今現実にそんな社会人人生を送っているお兄さんからすればたまったものではないか。

それからお兄さんは今日提出する書類があるらしく確認のため会話から外れることになった。

お兄さんが会話から外れたことで必然と言葉を交わすのは俺とアイの二人、そんな中アイがスマホの映像で見せたいものがあるらしく取り出した。

「……見ずらい」

「まあ狭いし揺れるからな」

手元に持ったスマホの映像を俺に見せようとしたのだが、電車に乗っているせいか手

が震えて画面が見づらい。

そんな中どうしたものかと考えるアイだったが、何かを思いついたのか若干恥ずかしそうにしながら上目遣いで俺を見上げてきた。どうして何かを思いついて恥ずかしそうにするのか俺には理解できなかったが、次のアイの行動でその答えを俺は知った。

「……………こうすれば見えるよね?」

「……………それは予想外だわ」

思わず口に出してしまった。

アイが行った行動、それは俺と密着していることで形を変えているアイ自身の胸の上にもスマホを置くという行為だ。まあ確かにその胸を台にすることで俺の位置から見えやすくはなるけども、流石にこれは予想外だった。大事なことなので二回言っておく。

「……………恥ずかしいねちよつと」

「……………ああ」

はにかむアイが可愛い……………じゃなくて。

俺はこの状況どうすればいいんだ。スマホを見るということは必然的にアイの豊かな胸を直視することに等しいので何とも言えない、かといって視線を上によればアイが上目遣いで見つめてくるという構図……………あかん、この構図はあかん。あと心なしかアイが更に密着してきているような気がする。だってその証拠にさつきよりもむにゆり

と胸が歪んでいるのだから。

それから暫くそんな時間が続いて俺たちは目的の駅に着き電車から降りた。

アイが見せたがっていた動画の感想？ そんなもんは自分の理性と戦うのに必死で記憶に残つちやいない。

「まさか電車の中で幼馴染がたわわチャレンジをしてくるとは思わなかった」

「い、言わないでつてば！ でも……どうだった？」

「何が？」

「その……私の胸の感触……」

「……柔らかかった」

「そ、そう……」

ぎこちなく会話をする俺たちを不思議そうに見る目を多く感じた気がするが、生憎と今の俺とアイにそれを気に掛ける暇なんてないのだった。

電車でお兄さんと出会い、幼馴染にはたわわチャレンジというご褒美をもらい、学校に着いて席に座るといつもと同じBGMが耳に届く。

「おお、今日も良い弾力ですなあ」

「ちよ、ちよつともうやめ……あん……うあ……っ！」

胸を揉むバレー部ちゃんと揉まれるアイの声である。

というかバレエ部ちゃんは本当に毎日アイの胸を揉んでいるが飽きないな。二人の行為を見て顔を赤くしている男子に一睨みしてバレエ部ちゃんを引き剥がす。

「お前はいい加減それやめろって」

「いや、私からそれ取ったら何が残るの?」

「……………」

「…………私がいけないって自覚はあるんだけど、そこで無言になられるのは傷つくわ」

それはすまん。

でもバレエ部ちゃんって基本アイにセクハラしてる所しか印象が…………あれ、マジでバレエ部ちゃんに対する印象がそれしかない。いやいや、バレエ部ちゃんにもきつともつとマシな所があるはずだ。頭を振り絞って思い出すんだ…………あれ、マジで出てこない。

「声に出てるよ! 流石にひどすぎでしょ! そう思うよね!」

「…………ユー君の言う通りかなあ」

「ちよつと!」

珍しくバレエ部ちゃんが沈んだ瞬間である。

それから先生が来て朝礼が始まり、一限目が始まったのだが今回担当の先生がお休みと言うことで自習となった。騒がしくないのであれば隣の席、或いは後ろや前の席の生徒と話しながら勉強に取り組んでもいいということになったので、ごく自然な流れで

隣の席のアイが机を引っ付けてきた。

お互い分からない所は聞きあうのだが、その度に近くに来るアイの甘い香りが鼻をくすぐってしまう。とはいえ意識しているのは俺だけでなくアイも同じようで少しばかり照れている。

「……………」

「……………(ニヤニヤ)」

視線を感じて後ろを見ればバレー部ちゃんがニヤニヤ笑っていた。

面白いものはなんもねえぞ、そう視線で伝えていた俺の頬に優しくプスツとシャーペンが当たたる。何かと思いい視線を向けるとアイがちよつとだけ不機嫌そうに頬を膨らませていた。俺はそんなアイを見て苦笑一つ、アイはそれが少し気に入らなかつたのかチクタクとシャーペンを突き続けてくる。

アイが抱える気持ちはおそらく嫉妬、それはずっと傍にいたからこそ分かるもの。

『今は私と一緒に勉強してるの。余所見しないで』

アイの目はそう言っているようで、そんなアイが本当に可愛らしく思えて仕方ない。

ペンを握る手とは別の空いた手でアイの空いている手を握る。左利きの俺、右利きのアイだからこそ繋がることのできる手と手。

「あ……………ふふ」

一瞬びつくりしたようだったがすぐに笑顔が咲いた。

そんなアイの表情を見て勉強を本格的に再開しようと手を離そうとしたのだが、離さないと言わんばかりに強く握られた。今度は俺の方が驚いてアイに視線を向けるのだが、アイはすでに視線をノートに移して文字を書いている。けれどもその横顔は少し赤くなっていて照れているというのはよく分かった。

アイの様子に小さく笑みが零れ視線をノートに移したその時、アイがノートを滑らせるように俺の机へと侵入させた。そのノートの端には小さく「嫌？」と女の子特有の丸っこい字が書かれていた。

それを見て俺が書いた文字はこうである。

「嫌じゃないよ」

そう返した文字を見てさらに強くなった握るアイの手の力。

学校の授業の時間だというのに今日はとつても甘酸っぱい不思議な時間。たまには悪くないなど、視線が絡み合ったアイと一緒に笑い合うのだった。

もちろん、その一限目の後の休憩時間にバレー部ちゃんがかからかってくるのもお約束と言えばお約束なのだった。

6 たわわ！

「ふんふんふん♪」

「ご機嫌だな」

俺は隣で鼻歌を歌っていたアイにそう問いかけた。

今いる場所は俺の家の自室、ベッドを背もたれに二人して座りアイが俺に寄りかかりながら昔のアルバムを見ているという構図だ。昔と言ってもそんなに昔のアルバムではない、高校に入学してイベントなどの際に姉さんが撮った写真が主である。

「うん。こうして改めてみてみると新鮮だなんて」

そう言ったアイはまたアルバムに視線を戻す。

俺はスマホを片手に、アイがパラパラとアルバムをめくる音だけが聞こえる。会話も少なく静かではあるが、俺はこんな空間が好きだ。すぐ傍にアイがいることでその体温が感じられ安心できる瞬間、チラッと見つめて気付かれ視線が絡み合うと照れくさそうに微笑むアイを見るとほんわかとした温かい何かが胸の内に溢れ出す。

そんな風にゆったりとした時間が流れていた時、あつ！ とアイが一枚の写真を見て声を上げた。

その写真は文化際の時に取った写真。俺たちのクラスで提案された男装喫茶というものだ。どのような物かという言葉の通り、クラスの女性陣が執事服を着て客を持て成す喫茶店である。

「懐かしいな、あの時は思った以上に盛り上がったよな」

「そうだよねえ。まあ私としては凄く恥ずかしかったけど」

確かにあの時のアイは少し恥ずかしがっていたか、でも途中からはバレー部ちゃんと一緒にノリノリで接客していたなあと今でも思い出せる。まあ男装喫茶とは名ばかりで面白かったもの、それはある一つの場所において絶対に誤魔化せない男装だったというものだ。いくら執事服を着こんでもアイの持つ豊満なバストは残念ながら隠すことはできず、胸元がとにかく窮屈だったとアイ自身も俺に言っていた。もちろんこれはアイだけでなく他の女子も全員同じ気持ちだったらしい。

「本当にキツかったよあれ……」

「胸が？」

「うん………つて、もう!」

思わず言つちやつたと、そう言わんばかりにポカポカと肩を叩いてくる。

そんなアイに悪い悪いと苦笑しながら落ち着かせ、あの時の思ったことをそのまま口にしてみた。

「アイの男装は新鮮だったけどさ。やっぱアイの可愛さは隠せなかったよな」

どんなに外面を男に寄せてもアイの可愛らしさというのは隠せない。

他の女子に対して俺以外の男子も同じように考えたことのはずだ。だからこそ女性よりも男性の方が客足が伸び売上に関して言えば俺たちのクラスはトップに近い数字だったのだから。

そう伝えたアイは目に見えて照れていた。

そんなアイに悪戯心が芽生えて少しだけ困らせたくなくなってしまった。

「俺のスマホにも写真入ってるぞ？ その時の別に撮った写真」

「え!？」

驚くアイを他所に俺は画像が収められているファイルを開く。

そこからアイに見せようとした写真を出そうとしたのだが……ここで一つ予想外な写真が現れた。

「……あ」

それは妹ちゃんから送られてきたアイの風呂上りの写真だった。当時は送られてきた時に何してんだと呆れたものでアイに悪いと消したものだと思っていたのだが、どうやらそのまま綺麗に残っていたみたいだ。これは流石に拙いだろうと、アイに気づかれぬ前に咄嗟に消そうとしたのだが。

「どうしたの? ……あ、ははくん」

さつきまで恥ずかしそうに真つ赤な表情だったのに、とても活き活きとしたアイさんがいらっしやった。

スマホの画像を見て動きを止めた俺、そこから察せられることは何か、それはアイの口から見事に俺に投げかけるのだった。

「エッチな画像でも見つけたの? へへ、ほへ」

「……えつと、アイさん?」

アイから不穏な空気を感じて後ろに後退すると、アイは豹のように獲物を見つけたかのような目をして四つん這いになじり寄ってくる。その間外されたカッターシャツのボタンから谷間が見えたのだが、今の俺にそれを堪能する余裕は決してなかった。

「……………」

「……………」

お互いについて動き出すのかを見計らう時間が過ぎる。

まさに勝負は一瞬というやつだ。俺はアイが息を吐いたその瞬間一気にスマホの画面に視線を移し写真を削除するように操作する。しかしそれを良しとさせないようにアイが飛びかかってきた。

「なんもないから! ちょっと消すだけだから!」

「消すって言っちゃってるじゃん！」

しまった、勢いで墓穴を掘ってしまった。

抱き着かれるような体勢になったことで拙いと感じ、咄嗟に立ち上がろうとした俺。アイも逃がすまいと立ち上がるうとした……それが拙かった。

「きやつ!？」

「え、うお!？」

尻に敷いていた座布団でアイが足を滑らせたのだ。

俺の腕を掴んだまま倒れるものだから流れに逆らえず一緒に倒れる。ドドン!と姉さんがいたら何かあったのかと慌てるほどには大きな音が響いたと思う。

膝が床に直に落ちて痛みが走るがそれよりも、俺は自分の下で倒れたアイが心配だった。

「大丈夫か? アイ……」

名前を呼び、アイの状態を確認した瞬間俺の時間が止まった気がした。

目と鼻の先、少し前に顔を突き出せばアイの唇に触れてしまう……それほどの至近距離にアイの顔があった。

「いったたた……うん。だいじょ……う……ぶ」

アイも目を開けて状況が確認できたのか、俺の問いに答える言葉は最後まで続かな

かった。

俺がアイに被さる様に、見方によっては俺がアイを押し倒しているようにも見えらう。痛みのない方の足はアイの股の間に位置し、左手はしっかりとアイの胸に押し当てられギュッと押し潰していた。

「……………」

お互いにどうしていいのかわからないのか微動だにしない。

聞こえるのは俺とアイ互いの吐息と、左手から伝わるアイの心臓の鼓動だけ。数秒、数十秒、どれだけそうしていただろうか。退かないといけない、なのに体が動かない矛盾、この温もりを、この柔らかさをもっと味わいたいという欲求。

左手に少し力を込め動かせば、ビクツと震えるアイの体。

俺はその震えを感じ取り少しばかり冷静になった。事故とはいえアイはもしかしたら怖いのかも知れない。だとしたら早く離れないと。そう考え体に入力しようとしたその時、アイはその時俺が想像していなかった言葉を放った。

「……………」

「……………」

思わず問い返した。

相変わらず頬が赤く、若干涙目になっているアイだったが……………その浮かべている表情

は少しばかり色気を見せる笑顔。アイは再び口を開く。

「いいよ……ユー君なら。いつだって」

「……アイ」

目を瞑ったアイは待っている。

何をなんて考える必要もないことだった。ゆっくりと、ゆっくりと近づいていく距離。後少しで互いの距離が0になる正にその時だった。

ピロロンツ！

「っ!？」

俺のスマホがメッセージの着信を知らせた。

その音を聞いて俺は一気に頭が冷えたのを感じ上体を起こす。アイも同じように起き上がったって服装を整えた。

スマホに届いたメッセージはアイの妹ちゃんからで、帰ってこないアイが俺の家に来ているのかという内容だった。

「妹ちゃんからだ。もしかして今日ここに来るの伝えてない?」

「え……あつー!」

どうやら伝えてなかったようだ。

アイは自身のスマホからメッセージを送りこれで大丈夫と言って改めて座りなおす。

するとやはり思い出すのは先ほどの光景なわけで、俺とアイが喋らなくなるのは当然のことだった。

でもこの空気を最初に打破したのはアイで、完全に忘れかけていたあの話題を呼び起こすのだった。

「それで……さっきの写真のことなんだけど」

「……あ、やつぱ気になる？」

「……うん」

まあしようがないかと、さっきよりも冷静になった俺は観念してアイに写真を見せた。

「……これって！」

「……前に妹ちゃんから送られてきたやつでな。残ってたみたいだ」

アイの風呂上り、火照った体をバスタオル一枚巻いた状態の姿だ。大きな胸が今にも零れそうに包まれているそんな画像。

さて、これに対してアイはどんなリアクションを取るのか。

おそらく恥ずかしくて消してと言ってくるだろうなと思っていたが、意外にもアイは予想外の反応を見せた。

「なんだ……良かった。別の女の人の写真じゃないんだね……」

「……お、おう」

俺の方がどんなりアクションをすればいいか迷う切り返し方だった。

アイは悪戯が成功したかのように微笑み、それでも少しだけ照れくさそうに。

「と、特別にその写真を所持することを許可します！ ユー君だけだからねこんなこと言うのは！」

そんなことを言いながらアイは俺に指を突きつけた。

外は暗くなり少しだけ冷え込む。でも俺の体を取り巻く体温は高く熱いまま、それはアイが帰宅するその時まで続くのだった。

7たわわ!

学校の日だ。

いつもは起きている時間で朝食を取り支度をしているはずの時間帯、だというのに俺はまだベッドの上にいる。

「……………ほっ！ ほっ！」

……風邪、ひいちゃったみたい。

一昨日から少しばかり様子がおかしかったが、今日の朝目が覚めた瞬間強烈な体の怠さに襲われた。頭が重く咳も止まらない、典型的な風邪の症状に俺はマジかと思わず眩いた。朝食を作っている姉さんに現状を伝えに行かないと拙い、そう思っているのだが思った以上に体が動かない。額に手を当ててみるが結構熱い、熱もそれなりにあるようで重い溜息が零れる。

それから暫く寝ているとどうやら姉さんが部屋から出てこない俺のことが気になつたみたいで。

「ユー君？ まだ寝てるの？」

ドアの向こうから聞こえる姉さんの声に俺は掠れたような声で答えるのだった。

「……姉さん、ちよつとしんどい……(ぼっ)ほっ!」

「ちよ、ちよつとユー君!」

ボタンと音を立てて姉さんが部屋に入ってきた。

姉さんは寝ている俺に近づくとすぐ状況が把握できたのか額に手を当てて、それからすぐに薬と濡れたタオルを持つてきてくれた。早く会社に行かないといけないはずなのに、こうまで手間を掛けさせてしまうことが申し訳なく思う。

「大丈夫? 起きれる?」

「……うん」

姉さんに手を貸してもらい起き上がると、それだけで頭痛が頭に広がり思わず眉間を抑えた。風邪の症状として咳とか鼻水だけならどうとでもなるのだが、このグワングワンとした頭の痛みだけはどれだけ経験しても慣れることができない。起き上がっただけでこれならおそらく立ち上がったらもつと痛いのだろう。

「ほら、これ飲んで。そうそっくり子だね」

少しばかり姉さんの言葉が子供向け……まあまだ俺は高校生だけどさ。

姉さんに背中を支えてもらいながら薬と一緒に水を飲んで一息、大きく息を吐き出して横に寝転んだ。ああこれは本格的に今日学校に行ける状態ではないか……。

姉さんから体温計を計ってみると――。

「38度……完全に風邪だね」

「みたいだな……」

「学校に連絡しておくから今日はゆっくり寝ておくこと、いい?」

「……念押ししなくても動けるほど元氣じゃないんだよなこれが」

ベッドの上で暇だからと言ってゲームすらやる気力がない。

どうやら今回の風邪は一年に数回あるかないかの質の悪いものに罹ったらしい。とりあえず姉さんに俺は大丈夫だからと会社に行くように言った。姉さんは本当に心配しているようで有休でも取ろうかと言いつつ出したが、流石にそれはいいと頑なに断った。最終的に姉さんは仕事に向かったが、俺の部屋から出るその瞬間まで心配そうに俺を見つめていたのだった。

姉さんが家から出て行って静寂な時間が訪れる。

体の熱さで頭がクラクラとしているせいか妙に色んな音が鮮明に聞こえてくる。時計の秒針の音、自身の心臓の音、遠くを走る車の音……不思議と色んな音が鮮明に聞こえてきた。

しばらくボーっとして過ごしていたその時、俺はあつと大切なことを思い出ししんどいと訴える体に鞭を打ってスマホを手に取った。

lineを起動しアイの名前へ飛び一言。

『悪い、風邪引いた。今日は学校休む』

いつも一緒に登校しているから行けないことを伝えなくてはならない。短く伝えるべき用件だけ書いて俺はスマホを置いた。

その時点で既に限界だったのか俺の瞼は徐々に下がってくる。

俺はアイからの返事を待つことなく眠りに就くのだった。

「……………うん……………あれ？」

重い瞼を開けて、どうして俺はベッドの上にいるのだろうかとうとうと首を傾げた。

しばらくどうしてかを考えていると今日は風邪を引いたので学校を休んだことを思い出した。どうやらそんなことすら忘れてしまいうくらいにボーっとしているということなのだろう。とはいえ頭痛に関しては少しだけマシになり鋭い痛みが走ることはなかった。

時計を見ると正午、ちょうど学校では午前の授業が終わった頃だろう。

ふうつと、大きく息を吐き出す。

そこで俺は一つのおかしなことに気づいた。それは俺の額でひんやりと伝わる冷たいタオルの存在だ。姉さんが仕事に向かってから俺はずっと寝ていたため、額に乗って

いるタオルを変えてはいない。だからこそうして冷たさが伝わることはありえないはずなのだ。誰かが交換した？ だとすると一体誰が？ そんな疑問を抱いていた時、ガチャリと俺の部屋の扉が開いた。

一体誰がとその人物を確認した時、俺は正直驚いた。

だってそこにいた存在はこの時間に決して俺の部屋にいるはずのない存在だったから。

「……………なんで……………お前が」

「あー… 起きたんだユー君。大丈夫？ 辛くない？」

俺の部屋に現れた存在、それはアイだった。

アイは起きていた俺を確認すると嬉しそうにしたのも束の間、すぐに心配そうに俺に駆け寄ってきた。一体どうしてここにいいのか、俺の視線から察したのかアイは話してくれた。

「あはは……………ユー君がメッセージくれたでしょ？ それから心配になっちゃって学校休んじやいました！」

「休んじやいましたって……………」

別にそこまでしてくれなくても大丈夫なのに、そう言いかけるよりも先にアイが続けた。

「ユー君のお姉さんも会社に行くだろうし、そんな中ユー君一人だけ苦しんで思うと我慢できなかったの。私はたぶんそんな状態なら学校に行っても集中できないだろうし。なら思い切って休んで看病しちやえってね」

「……………そう」

「うん。今から学校行けって言っても聞かないし聞けないよ？ もうお昼だし」

……………強かだな。

時計を指さして笑顔を向けてくるアイにそう思った。

それからアイに寝ていなさいとベッドに押しさえつけられ再びベッドの住人と化し、暫くすると部屋から出て行ったアイがお腕を持って帰ってきた。

「辛いだろうけど少しでもお腹に入れないとね。おかゆ作ったから食べよ？」

「……………悪いな」

確かにさつきから腹がぐうぐうと鳴っていたところだ。

正直食欲はそんなにあるわけではないのだが、少しだけお腹が減っているのもあるし何より、せつかくアイが作ってくれたのだからそれを無駄にしたくはなかった。

起き上がるのをアイの手を借りて上体を起こす。

お腕に入ったおかゆをスプーンで掬い、それを直接アイは口元に運んでくる。

「はい。あ〜ん」

「あむ」

いつもなら恥ずかしいこんな行為だが、今の俺はそれすら特に考えないほど参ってしまっているのだろう。導かれるままに口元に運ばれたスプーンを加えおかゆを喉に通す。甘すぎずしょっぱすぎず、絶妙な味わいのおかゆが喉を通る。食欲がなかったのに反して自分でも意外に思うほど早くアイが作ってくれたおかゆを完食した。

「……………」馳走様、美味しかったよ」

「ふふ、お粗末様でした♪」

可愛らしい笑顔のアイに別の意味で熱が上がりそうになる。

とはいえ流石にそこまでの余裕はやはりなかった。おかゆを食べてからまた眠気が襲ってきたためゆっくりとベッドに横たわる。

横になった俺を見てアイは当然のように額に乗ったタオルを水に入れ、再び冷えた状態となったものを額に戻してくれた。少しばかり温かくなっていたタオルが冷たくなつたことで何とも言えない気持ちよさを齎してくれる。

「ありがとうなアイ、本当に助かった」

「いいんだよ。私がしたくてやってるんだから」

……。

思えば昔からアイはこうだった気がする。

何かあれば率先して世話を焼きたがって、ご飯を作ったりするのも大変だろうに嫌な顔せずやってくれる。今日だってわざわざ学校まで休んで……アイはこうは言っていて、何かお返しをしないとイケないな。

「眠そうだね。ゆっくりお休み。何かあつたら言つて。そこで本読んでるから」

……申し訳なさがある。でもそれだけじゃなくて。

「風邪……移つちまうぞ？」

「大丈夫だよ。ユ一君と違つて体調管理はバツチリです。だから安心して看病されてくださいな」

心配してくれるアイに傍にいて欲しい、きつとそう思っているのだろう俺は。

風邪を引くと人間というやつは少し弱くなってしまうのか、自分でも思う以上にアイという存在に依存する弱い自分が今ここにはいた。きつと風邪が治れば今まで通りになると思うけれど、でも今はこの我儘を、この弱さを許してほしい。

「アイ」

「うーん？」

「お前がいてくれて良かったよ。本当に」

「……いきなりだね？」

「迷惑だった？」

「全然、寧ろ……こうして一緒にいれることが私は嬉しいよ」

「……そっか、俺もだ」

「えへへ、同じだね」

ああ本当に。

この幼馴染にこういう場面では勝てないなど、改めて俺は思うのだった。

7. 5たわわ！

読んでいた文庫本から視線を外し、ベッドの上で眠るユー君を見つめる。

朝ここに来た時よりも楽そうに呼吸を繰り返す姿に私は安堵の息を吐いた。本来なら私はここにおらず学校にいるはずの時間、でも私はユー君から風邪を引き学校を休むとメツセージが届いたとき、居ても立ってもいられずお母さんに学校を休む旨の連絡をして真つ直ぐにユー君の家に向かった。

お姉さんが仕事に出ているのは分かっていたので挨拶そこそこにお邪魔させてもらい、ユー君の部屋に入ったら——眠つてはいたけど荒く息を吐きながら苦しそうにしているユー君の姿が目に入ったのだ。

『ユー君！……あつ、えつと……まずはタオルを新しく冷やして、それから——』

ユー君の額に手を当てると思った以上に熱くて驚いた。

そこからは新しく水にタオルを浸して冷たくし改めてユー君の額に置き、乱れていた布団を直し、首元などといった簡単な部分の汗を拭く。ユー君と声を掛けながら汗を拭いたがそれでも目を覚まさず、どうやら深く眠り込んでしまっていたみたいだ。

そこからはお昼が近づいたから少しでも食べてもらおうとおかゆを作り、ちよつと恥

ずかしかつたけどユー君に食べさせてあげた。熱があるからなのかやけに素直に応じてくれた姿が少し可愛くて、本人の前では決して言えないけどユー君におかゆを食べさせてあげている間ずっとそんなことを考えていた。

そして……うう、あれはちよつと不意打ちというか。

『お前がいてくれてよかつたよ。本当に』

そういわれた時の表情はきつと見られてないはず、だってユー君はベッドの上において私は床に座っていたから。きつと見られていたら笑われたと思う。だってその時の私の表情はきつと、だらしなくにやけてしまっていたと思うから。その時の光景を思い出すだけでまだ熱が引くことはない、胸に手を当てるとドクンドクンと大きな鼓動が聞こえるほど。

座っていた座布団から動き、ユー君が寝ているベッドのすぐ傍まで近づいてみる。

「すう〜すう〜」

規則正しい寝息が聞こえる。うん、大分良くなったみたい。

ユー君の寝顔を眺めていると少しだけツンツンとかしたい気持ち溢れたけど時と場合を考えてぐつと我慢。代わりに私はユー君の寝顔をこれでもかと眺めることにした。

こうしているとずっと昔、ユー君と出会ってからのことを思い出す。

幼稚園、小学校、中学校、そして高校まで一緒に過ごしている。

思えばユー君はいつでも私の傍にいてくれて、助けてくれて守ってくれる。小学校高学年の時に胸が大きくて男子にからかわれていた時助けられたり、街で男の人に声を掛けられた時にそつと手を握って守ってくれたり、近い記憶では電車の中で痴漢から守ってくれたり……楽しい時も、辛い時もいつも傍にはユー君がいてくれた。

「……ふふ、ユー君」

名前を呼ぶたびに幸せが溢れる私はきつと、ずっと前からユー君を想っている。

ユー君と一緒にいると楽しくなる。

名前を呼んでもらうと嬉しくなる。

寄り添い触れ合っていると幸せになる。

ユー君が女の子と仲良くしていると黒い感情が溢れてくる。

そんな多くの感情がユー君という私をいつも包んでいる。

ユー君に時々私は喜怒哀楽が激しいとか言われるけど、それはユー君の前だけなんだよ？ 本当の私、それを見せられるのはいつだってユー君だけだ。

「……………」

ユー君ともつと触れ合いたい、もつと想ってもらいたい、もつと深く……繋がりたい。

少し前にユー君に追い被さられたことがあった。あの時の私はどうにかして思

わずいいよと囁いたけど、あの言葉に嘘は絶対なかった。ユー君が求めてくれるなら……ううん、求めて欲しいといつも思っている。こう考える私はエツチな子なのだろうか、でもそれはしようがないだろう。だってこういうことを考える、誰かに対してそう思うこの気持ちは間違いなく恋、私がユー君のことを好きだと断言できる確かな感情なのだから。

「……本当にどうしようもないな私」

ぼそつと呟く私、行き場のない気持ちの発散に困る今という瞬間。
けれども、そんな私の頭を優しい手が撫でる。

「?」

「どうしたよ。そんなに近くにいたら寝ずらいんだがな」

私の頭を撫でているのは紛れもなくユー君だった。

いつから目が覚めていたのか分からないが、ユー君の様子からもう心配はしなくていいかと思えるくらいには回復しているように見える。油断は禁物だがほほほ大丈夫だろう、でもそう考えると今の状況がとても恥ずかしく思えてきて少し頬に熱が溜まる。

「いつから起きてたの?」

「ついさつき、大分楽になったみたい」

「そっか、良かった」

こうして言葉を交わす間でもユー君は私の頭を撫でてくれている。

さつき私は自身の抱える欲求を心の中で吐露したけどそれは今忘れることにしよう。だって、今こうしているこの瞬間がどうしようもなく――。

「どうした？ そんな笑顔になつて」

「ううん。何でもないよユー君♪」

幸せなのだから。

☆☆☆☆

「大丈夫かなあユー君」

隣で先輩がそう呟いた。

今日1日何やら仕事に身が入ってないなと思っていたら、どうやら弟のユー君が風邪を引いて寝込んでいるらしい。この弟を人一倍想う先輩のことだから気になつて仕方ないのだろう。仕事の中で重大なミスをするわけではないが軽いミスを連発するのは勘弁してほしい。退社するまでこの調子だというのなら、こいつの先輩であり教育係のような立ち位置の俺は少しも目を離すことができない。

「……………はあ」

重い溜息が出たが、まあ今日だけは大目に見ることにしよう。

少しばかり天然で俺を困らせることが少なくない後輩だが、家族のことを大切に想うその気持ちは大事にして欲しいと思っっているから。

「……………あつー！」

隣でそう声を上げた後輩は口元に手を当ててやつちやつたと言わんばかりの表情だ。

チラツと見た俺に気づいたのか後輩は気まずそうに視線を逸らし、必死に直そうとパソコンにかじりつく。その様子からこれ以上ミスの直しを俺にやらせまいと考えて自力でどうにかしようと考えたのだろう。俺はそんな後輩にいつもの緩い感じはどうしたのかと言いそうになったがその言葉を呑み込み、苦笑を零して後輩のデスクに椅子を滑らしパソコンを覗き込んだ。

「ちよ、先輩?」

「見せてみる」

そういつてパソコンの画面を見ると、やはり大きくはない小さなミスをやらかしていた。

「……………(´)めんなさい」

本当に申し訳ない、そんな表情で謝ってくる後輩に気にするなと言う。すると後輩は

目を点にして俺に視線を向けてきた。大方いつもの嫌味を言わないのを何故と思っ
ているのだろう、後輩の中で俺がどういいう存在なのか今分かった気がする。

「今日は特別だ」

「え？」

「ユー君が心配なんだろう？」

「……はい」

「家庭の事情を持ち込んで仕事に影響するのは決していいことじゃない。こう言っちゃ
冷たい言い方かもしれないが、会社からすれば家庭の事情なんざどうでもいい……は言
い過ぎかもしれないけど似たようなもんだ」

「……そうですよね」

「でも……」

「はい？」

「俺はそういうお前を否定はしない。その優しさはお前の良さであり美点ってやつだ。
まだお前と知り合ってそんなに長いわけじゃないけど、お前が優しいやつで良い人間な
のはこの会社で誰よりも分かっているつもりだ俺は」

後輩に目を向けずパソコンの操作をする。

そんな中後輩がやけに静かだなと思っ
て目を向けてみると、後輩は口を開けて俺を見

つめていた。その顔がどこか間抜けに見えて思わず笑ってしまう。

「……っ！ す、すみません。もう大丈夫ですから。先輩は自分のお仕事続けてください」

「ん？ そうか」

少し顔を伏せて作業に取り掛かる後輩の様子に首を傾げ俺も自分の作業を開始した。

お互い言葉を交わさずに淡々と作業を続ける中、後輩が口を開いた。

「ありがとうございます。先輩。もう大丈夫です」

ただ一言、短く笑顔で後輩が俺に告げた。

何だかスッキリしたような後輩の表情を見て、俺はもう大丈夫だなと安心するのだった。

「……………?」

しばらくすると何か戸惑うような声が後輩から聞こえそちらを見ると、クエスチョンマークが実際に見えるのではないかと思えるほどに戸惑う後輩の姿があった。

なんだ、またミスでもしたのか？

そう思っていると。

「先輩！ このパソコン壊れてます！ ずっと下にカーソルが行き続けるんですけど！」

「はあ？」

そう言われ画面を見てみると確かにカーソルが下に向かって動き続けている。

これは本当に故障か？ そう思った俺だったがとあることに気づいて溜息を吐いた。

「先輩！ 直りますか!?!」

「……ああ、えつとだな」

別にパソコンが壊れているわけじゃない。

単純に後輩の豊かな胸がその重さで下へ移動させるキーを押しているだけだった。

前のめりに画面を覗き込んでいるからこそそういう現象が起きているわけだが……
はてさてどうやって伝えるのが正解か。俺はある意味でこんなしょうもないことに頭
を悩ませるのだった。

聖夜のたわわ!

クリスマス、それは一年に一度訪れる聖夜。

恋人たちが手を繋ぎ、美しいイルミネーションに彩られた街を歩く。淡く、小さく、ゆらゆらと降る雪が幻想的な光景を見せ聖夜の名に相応しい一日を齎していた。

さて、そんなクリスマスを過ごす一組の少年少女。

お互いがお互いを愛おしそうに、きつく指を絡ませ過ごすその姿は少しだけ初々しさがあった。その初々しさというのも当然で、彼らにとつてこのクリスマスは恋人という関係になって初めてのものだったからだ。もちろん付き合いだして数ヶ月は経過し、人として多くのことを経験し過ぎてきた。でもそれでも、恋人として初めてのクリスマスと言うのは特別で、そして新鮮なものだったのだろう。

「ユー君♪」

「うん?」

「ふふ、呼んでみただけ」

「……なんだよそれ」

楽しそうにじやれる二人、ユーと呼ばれた少年と、そんな彼と手を繋ぐアイと言う名

の少女。

二人は雪の降る街並みを歩く。二人を繋ぐ手と手、強く結ばれたそれは決して離さないと言わんばかりの強さがある。幼馴染として過ごしてきた二人は今、恋人として繋がっている。恋人なる前でもそれなりに近しく親しい間柄の二人ではあったが、こうして恋人となつている今の繋がりはとても強いというのが彼らの雰囲気から伝わってきた。

これはクリスマスという瞬間を彩る聖夜の一時、短いながらも綴られる二人のお話。

「うう〜美味しい♪」

「そうだな。こういう日にしか食べないけど、やっぱりケーキは美味しい」

クリスマスという今日、朝から二人でデザートをしたユーとアイの二人はその日の締めとして、道中帰ったら食べようと思い買ったケーキを食べていた。場所はユーの家で、今日アイはユーの家に泊まる予定である。机の上に置かれているケーキは定番のイチゴショートにチョコケーキ、ユーがチョコでアイがイチゴである。

互いにケーキを口に運びその感想を口にする。

ユーが二口目を食べようとしたその時、じーつと横から視線を感じたため見てみると、アイが美味しそうだなあと小さく呟きながら見つめてきていた。ユーはそんなアイ

の様子に苦笑し、自分のチョコケーキをほらとアイに差し出す。

「あ〜ん」

少し前まではこの行為も恥ずかしかつたがなんのその、もう付き合いだしてそれなりに経っているのだ。このくらいで照れてしまうようなことはなかった。お返しにアイから同じようにあ〜んをされ、ユーも特に考えることなくそれを口に入れる。

チョコケーキとはまた違った甘い味が口の中に広がり、美味しいと口に出せばアイも満足そうに笑顔を見せた。

それから二人はケーキを食べ終え、ベッドを背にしてアイがユーに寄りかかるようにして寛いでいた。アイの浮かべる蕩けたような、けれども決して彼女の愛らしさを損なわせない幸せそうな笑みを知るものはユーしかいない。そしてそんな彼女を何よりも愛おしそうに、壊れ物を扱うかのように優しく頭を撫でるユーのこともアイしか知らない。

「ねえユー君」

「なんだ？」

アイの問いかけにユーは視線を向けて応える。

アイもユーの体に寄りかかるようにしていた体勢から座り直し、ユーの目を見て言葉を続ける。

「私たちが付き合いだして初めてのクリスマス、どうだった？」

アイからの問いかけ、それは単純に今日一日がどういったものかの感想だ。

それに対し、ユーは朝から今までのことを順番に思い出し、ゆつくりとその答えを伝えた。

「楽しかったよ。いつもよりずっと」

楽しかった、ありきたりな感想だがこれが本当に一番の言葉だった。

それはユーだけでなくアイも同じようで、私もと同意し再びユーに寄りかかる。本当に無防備なアイの姿、そんな安心しきった表情のアイに少しだけ悪戯したくなったユーはこんな言葉を口にした。

「もつとアイのことを好きになつたかな。今日選んでくれた服装も可愛かったし、手を繋いだ時にまだ少しだけ照れたような仕草も可愛かったし、こうして今……俺だけにそんな姿を見せてくれるアイが本当に大好きだ」

「……っつー！」

ユーの考えたように、アイは顔を真っ赤にしてユーの胸に顔を擦り付けるように隠す。

普段の行動の中では慣れてきたようなものだが、こうして間近で大好きと伝えられると途端にアイは小さくなる。照れたように顔を隠しても、どうやらユーの言葉が嬉

しいという感情は隠しきれていない。何故ならユーの言葉を聞き離れようとせず逆に強くその身を寄せてくるからだ。

ずっと見てきたものだが相変わらず破壊力は強い、そう思ったユーは小柄なアイの体を抱きしめた。

「あ……ふふ、ユー君♪」

抱きしめられたアイも嬉しさを隠さずに抱きしめ返す。

小柄なアイの体はすぐにユーの腕の中に納まってしまうほどだが、彼女の持つ女性特有の大きな膨らみはそうはいかない。こうして互いの体が密着したことで、とても苦しうにその形を歪めている。しばらくそうして過ごしていると、アイがそつと顔を上げた。少しばかり潤み、何かを期待するような目をしているアイを見て、ユーはたまたまそのアイの唇に己の唇を押し当てた。

「っ……あむ、じゅる」

押し当てられた唇、それを割る様に入ってきた舌にアイは一瞬驚くも、すぐに応えるように舌を絡ませた。

付き合った当初、いつもしていた唇と唇を触れ合わせるだけじゃない。舌と舌を絡ませる大人のキスだ。互いが互いをこれでもかと求めるように、一心不乱に相手を求めあうその光景は淫靡のよう。

「ちゅぴ……ちゅぱ……つぷはー」

少し満足できたのか互いの口を離すと、互いの唾液が結びつくように糸を作る。

つーつと伸びたそれは最終的に切れ、ポトツと地面に落ちた。アイは一瞬それに視線を向けるも、すぐにユーに視線を戻して口を開く。

「……ふふ、ユー君真つ赤だよ？」

「それを言うならアイもだけど？ 林檎みたいだ」

お互いに顔が赤いと指摘すれば、お互いに吹き出すように笑みが零れる。

アイはユーの右手を両手で掴みそのまま自身の胸に誘う。誘われたその手は段々とアイの胸に沈んでいくほどに柔らかさを感じるが、少しでも力を抜けば押し返されるのではないかと思うほどに弾力もある。その状態でアイは一言、更なる期待の籠った想いを言葉に乗せてユーへと向ける。

「こんなにドキドキしちゃってるの……鎮めて、慰めて……ユー君」

涙を少し見せながらそう問いかける姿は幻想の妖魔のような印象をユーに抱かせる。

いつもの可愛らしさ、愛らしさ、それを合わせて更に妖艶な大人っぽさを醸し出すアイの姿。それはユーの男の部分を刺激するにはあまりにも十分すぎる力を持っていたのだ。

「……つたく、いつからこんなにいい女になったんだお前は」

そういつて優しくアイを押し倒す。

ユーのスイツチの入った様子を見てもアイは慌てたりはしなかった。なぜならユーに全てを預ける覚悟ができているから、そして何よりユーに求めて欲しいと思っっているし更なる繋がり望んでいるから。

「えへへ、ユー君の女だもん。ユー君のおかげで、私はユー君の言ういい女になれたんだから」

恥ずかしいこと言っちゃったと舌を出して照れるアイ、そして更に続けられた言葉は完全にユーから理性というものを取り払う。

「それに……こんなにエツチになったのもユー君のせいなんだからね？ だからずっと私だけを見て、私だけを想って、私だけを愛して……っ！」

そんなこと当たり前だ。

そう小さく囁いてユーはアイに対する全ての想いをぶつけるのだった。

クリスマス、聖夜と呼ばれた時間はまだ続く。

ユーとアイ、二人の夜も同様に……まだまだ続いていく。

8たわわ！

「……んじゃ先生、おつかれ〜つす」

「おう。じゃあな」

日直の日誌を職員室の担任に届け俺は下駄箱に向かう。

いつもなら下校は俺と同じく部活に入っていないアイと一緒にのだが、今日アイはとある喫茶店のバイトの日なので一緒ではない。

上靴を脱ぎ靴を履いて玄関から出ると、バレエ部の女子がランニングをしている姿が目に入った。帰りに校外を走っているのを見たことがあるがそれなりに長い距離を走っていた。流石は運動部、体力作りからよくやるなあと感心するものだ。

息を荒く吐く者、そうでない者たちが校内に帰ってくる中見知った顔を見つけた。

「よ、バレエ部ちゃん」

「？ ああユーか。あんた今帰りなの？」

アイの親友であり俺にとっても友人であるバレエ部ちゃんだった。

汗を流しながら息を吐く姿はいつものバレエ部ちゃんからは想像できない姿、それだけバレエに本気で打ち込んでいるのが窺える。アイもバレエをしているバレエ部ちゃ

んはとてめかっこよく自慢の親友だと言っていたし、こういうところを見れば少しだけかっこよく見えてしまうかな。決して言葉には出さないけど。

「うん? なんかわななことを考えてない?」

……女は勘が鋭いと言うがその通りらしい。

バレエ部ちゃんに訝し気に見てきたが俺は別に変わったことは考えていないため特に慌てることもなかった。

「別に変わったことなんて考えてないさ、寧ろ逆かな」

「逆?」

「ああ」

言葉には出さないと口をつたから言わないさ。

バレエ部ちゃんのことだからかかってくるに決まってるからだ。いつもの構図はアイを弄るのはバレエ部ちゃん、そしてそんなバレエ部ちゃんを弄るのが俺なのだ。バレエ部ちゃんには悪いがこれだけは譲れん、君は一生俺を弄ることなどできん、ずっと俺に弄られる。

「……今度こそ変わったこと考えてる気がするわ」

「……………」

本当に勘が鋭いなこの子は。

しかしこうして俺と話していいのかねバレエ部ちゃんは。気づいているか分からないけどバレエ部ちゃんと一緒に来た部員たちは既にここにはいないのだが。

俺の言いたいことに気づいたのかバレエ部ちゃんはあつと慌てたように声を上げた……やっぱり気づいてなかったらしい。

「まっず、それじゃあねユー。また明日！」

「おう」

バレエ部ちゃんに短くそう返し歩き出そうとした時、もう一度俺はバレエ部ちゃんに呼び止められた。

何だと思いつき振り向くとバレエ部ちゃんはこんなことを言い出した。

「ユーさ、来週暇？」

「来週？……特に予定はないけど」

バレエ部ちゃんにそう聞かれ考えてみたが特に予定はなかった。

別れないと伝えるとバレエ部ちゃんは頷いて続ける。

「実はさ、海に行こうと思ってるんだよ。もちろんアイも誘ってる」

「アイも？」

ああそういうえば友達と海に行くかもしれないって言ってたような気がする。

気づけばもう暑くなってきたこの季節、アイの話聞いて偶には海もいいなあとは考

えたっけ。もちろんそう言うときアイは一緒に行こうと言っていたが。

「アイも誘ってるけど少し乗り気じゃなさそうなんだよね。それはたぶんユーと一緒にじゃないからだと思うんだ」

「いやそんなことは……」

友人……それも親友に誘われて渋るとは思えない。

アイは遊ぶことは好きだし海に限らず山登り、何気ない散歩すら楽しそうに俺の手を引いていたのを思い出す。そのアイとの記憶が嘘でなければバレー部ちゃんの誘いにすぐ頷かないとはやはり思えなかった。

「いやそれはあんただからでしょ」

「……自信持ってるのかな」

「まあね。アイは親友だよ？ 分からない方がおかしい」

そんなもんかと俺は苦笑する。

とはいえ海に行かないか……か。俺も別に暇だし海は嫌いじゃない、何だかんだバレー部ちゃんには世話になってるし飯でも奢る意味も込めて誘いに乗るとしようか。

「分かった。行くよ。アイも誘っとく」

「よしー」

分かりやすいようにガッツポーズをするバレー部ちゃん。

ていうかあれだよ、明らかに俺の参加よりもアイと一緒に来ることが彼女にとって本命なだけだ。海に行つて起きる光景が今からでも予想できる。水着に身を包んだアイにバレエ部ちゃんやセクハラをこれでもかとしてゐる光景が。流石にバレエ部ちゃんを信用してなさすぎだろうと思われるかもしれないが許せ、そういう期待を悪い意味で絶対裏切らないのがバレエ部ちゃんと言う女の子なのだから。

絶対アイを誘え、最重要任務だと言ひ聞かせられた俺はバレエ部ちゃんと別れ帰り道を歩く。

いつも用事があつたら立ち寄るであろうコンビニも今日は用がないためスルーする。コンビニを通り過ぎようとしたその時、中からごみ袋を持つて出てきた女性と目が合った。彼女とはコンビニを利用するときいつも会計をしてもらつていたので自然と頭を下げてしまった。

「こんにちは」

「あら、こんにちは。学校の帰り？」

「はい」

見た目は少し年上の女性、もしかしたら同じ年くらいに見えなくもないほどの若い女性。幼い顔立ちだが甘く見ることなかれ、アイに勝るとも劣らない立派なバストの持ち主だ。意識したわけではなかったが一度少しだけその胸をジツと見た時に思いつき

アイに足を踏まれたことがある。その時は痛みに悶える俺にそっぽを向いて私不機嫌ですと言わんばかりのアイ、カウンターの向こうにいるため何が起きたか分からず首を傾げていた女性……今思えばあの時の光景を他の客に見られなくて良かったと心から思う。

「そういえば今日は彼女は一緒じゃないの?」

「彼女? ……ああいつも一緒にいる子ですか? それなら彼女じゃないです。幼馴染なんです」

「あら、そうだったの。私てつきりあなたたち付き合ってるものだと思つたもの」

……別にこんなふうに勘違いするのはこの人が初めてではない。

商店街とかアイと買い物に行くときよく勘違いされて二人して赤くなつてしまつたが、こうして改めて言われてしまうとアイがいけないのだとしても恥ずかしいものである。そんな俺の様子にクスクスと笑つた女性は少し昔を思い出すように口を開いた。

「私にも幼馴染がいたの。高校に入学するときに離れてしまつただけだね」

女性のいきなりの語りに驚いたものの、俺も少しだけ気になつてその場から動かなかつた。

「それから今になるまでずっと会えなかつたわ。もう二度と会うこともない、そう思つて懐かしい記憶に蓋をしようと思つたことも少なくない。彼にとって私は口煩い幼馴染

染だったのかもしれないけど、私にとつては彼との時間は何よりも充実していたから」
儂そうに話す彼女の雰囲気はひどく印象に残った。

その様子から女性は別れた幼馴染のことがとても大好きなのだという想いが伝わってくる。とても真つ直ぐで純粋な想い、無粋かもしれないが俺は気になつて続きを聞くと思つたがここで一つのことへ気づく。それは女性が今になるまで会えなかつたと言つたものだ。その言い方はつまり、女性はその幼馴染と再会できたのではないかと俺は気付いた。

「その言い方……再会できたんですか？」

そう問いかけると、女性は花の咲いたような笑顔を浮かべて頷いた。

「ええ。中学の同窓会が先日あつて……そこでようやくね」

「……良かったですね」

「ふふ、ありがとう。でもね、私が彼と再会したのは正確には同窓会の時ではないのよ？」

「え？」

それは一体どういうことだろうか。

それから女性の話を聞いた俺は思わず笑つてしまった。どうやら女性がこのコンビで働いているとき、朝早くから利用しているお客さんがいてそれが例の幼馴染だった

そうだ。幼馴染は女性にずっと気づかず、同窓会という場所と女性が昔からやっていた仕事でようやく気付けて本当の意味で再会できたのだという。

そして今、女性と幼馴染の人は交際をしているのだとか。

ずっと離れていた幼馴染が再会し恋人となる。まるでドラマか何かだと思ってしまうが、少なくとも確かな現実が目の前にはあった。俺は当事者ではないが、純粋に幸せそうに話す女性を見て自分のことのように嬉しく思う。本当にどうしてかはわからないけれど。

こんな話を聞いたからだろうか。

今俺は無性に幼馴染に……アイに会いたくなってしまう。アイはまだバイトだけれど、また本人に黙ってバイト先に客として邪魔するのも悪くはないかもしれない。それから挨拶そこそこに俺は女性——胸元の名札で分かった徳森さんと別れる。

「ふふ、気持ちには分からないでもないけどまた幼馴染ちゃんに嫉妬されちゃうわよ?」
……本当に女性は鋭くて勝てない存在だな。

でもしようがないと思う。あんな立派な胸を持っていて名前は徳森さんときた……
徳森さん、うん素晴らしいトクモリをお持ちでございました。

コンビニから離れ、アイのバイト先である神戸屋に向かう。

そんな中ぼそつと無意識に口が動く。

「徳森さん、幸せそうだったな」

幼馴染と恋人になれたことが本当に幸せそうだった。

本当に大切な人ができた時、あそこまで人間とは綺麗に笑顔を浮かべることができるのか。俺は感慨深い何かを感じながら歩き続け、アイのバイト先である神戸屋に着き店内に入る。

店員の女性たちがいらっしやいませと声を上げ、一人の店員が走ってくる。

その途中でその店員は俺に気づき驚いて、けれどもすぐに笑顔となって俺の前まで来てくれる。

「いらっしやいませ！ 席にご案内しますね……ユ一君♪」

好きな人を想いあんな素敵な笑顔を浮かべられるのならそれはきつと素敵なことだ。俺もそろそろ答えを、分かり切った答えを出すのもいいかもしれない。

ただ一言好きだと、彼女に伝えるために。

9たわわ!

「青い空、白い雲、そして広大な海！　ってか」

海に来ればお約束の何とやらである。

今日はバレエ部ちゃんに誘われ海に遊びに来ていた。メンバーは俺を含めアイ、バレエ部ちゃん、そして特に顔見知りでもないバレエ部ちゃんの友達だ。正直来る途中もそうだがきつとこれからもそう、俺を除いて他のメンバーは女子と言うことで気まずいことこの上ない。バスの中でもずっと俺の隣にいて会話していたアイだけが癒し、心の拠り所だったの言うまでもなかった。

とはいえ周りが女子とは言っても俺はアイの付き添いみたいなものなので、俺は無理に彼女たちに関わらずのんびりしていても特に何も言われないうらう。

既に設置されていたパラソルの下、敷かれているシートの上に寝転がりゆっくりとした時間を過ごす。

もつとも一人の時間なんてアイたちが一緒にいる時点でできるわけもなく、誰かが俺の隣に立ったことで俺はそちらに視線を向けた。

そこにいたのは見慣れた顔、純白のビキニに身を包んだアイだった。

大きな胸が今にも零れそうで男の本能よろしく視線が向かってしまう。そしてそれはどうやらアイ自身にも気づかれてしまったようで、アイは顔を赤くしながら胸を隠すように体を抱いた。

「もうユー君……胸ばかり見ないでよ」

可愛らしく口を尖らせてそういうアイ、俺はすまんと言葉が気付いているだろうか。そうやって体を抱くものだからアイの豊かな胸が腕によつていやらしく形を歪めていることに。まあ基本天然なアイのことなので気づいていないのだろう。

俺の視線を感じて胸を隠していたアイだったが、すぐに腕を外して俺の隣に座った。

アイが着替え終わったことはバレー部ちゃんたちも一緒に腕を外して俺の隣に座っていたが、今ここにアイしかないことに首を傾げる。そんな俺の様子に気づいたアイがとある場所を指差したので俺もそちらに視線を向けた。すると既にそこにはバーチバレーを繰り広げるバレー部ちゃんたちの姿があった……何ともバイタリテイ溢れる連中である。

「アイは行かないのか？」

そう伝えるとアイはこう答えた。

「行くけどその前にさ、ユー君オイル塗ってよ」

「オイル？」

「うん……ダメ?」

首を傾げられ上目遣いに言われてしまつては断るわけにもいかないか。

分かつたと言うとアイは嬉しそうに笑顔を浮かべてうつ伏せに寝転がる。そんな体勢になったことで……まあ当たり前のことだが横乳が大変絶景と言わんばかりに見えるわけだ。先ほどアイに言われたばかりだと言うのに目が行つてしまふあたり俺もしようがないやつだということか。

アイから受け取つたオイルの液を手に落とし、しつかり混ぜてアイの背に触れる。

「ひゃんっ!」

「……変な声出すなつて」

「ご、ごめん……ちよつとひんやりしてたから」

このやり取り、色々な漫画で見たことあるような気がするな。

至極どうでもいいことを考えながらアイの背中からオイルを塗っていく。そこで俺は一つ壁にぶち当たるわけだが、背中から太ももに向かう中でお尻に触つても良いのだろうか。よくよく考えてみればアイと一緒に海に来たのはこれが初めてではないが俺がオイルを塗るのは初めてな気がする。

背中を塗り終えどうしようかと手を止めているとき、まるで察していたかのようにアイが口を開いた。

「いいよ……? お尻も触って」

「……いいのか?」

「うん。大丈夫」

純粹に信頼しているから故か。

アイの言葉と目からそれを感じ取った俺は続きを再開した。まあ塗っている最中アイの柔らかかな体に触れているのもあるが何より、くすぐったそうに切ない声を上げるアイのせいで俺は理性をフル動因して色々と戦っていたわけである。終わった後にありがとうといつも見せてくれる笑顔でお礼を言われたわけだが、この様子では俺の疲れにも気づいていないのかもしれない。

小さく溜息を吐いていた俺だったが、そんな手をアイが引く。

「ほらユー君! 一緒にいこ!」

「お、おい!」

本当ならアイを含め彼女たちが遊んでいるのをのんびりしながら眺めているつもりだったが……まあ。

「……まあいいか」

楽しそうに手を引いてくれるアイが喜んでくれるなら、それでもいいかと思ったのだった。

それからアイと共にバレエ部ちゃんたちのビーチバレーに加わることになった。正直バレエなんて一切やってない俺とアイが相手になるわけもないのだが、どうやらその辺はバレエ部ちゃんとその友達ちゃんも分かっているようで明らかに手を抜いてくれていた。

手を抜いてくれていても勝てるわけではないけれど。

「それ!」

「うわっ!?!」

「そら!」

「きやつ!?!」

「そ〜い!」

「……うう!」

バレエ部ちゃんはアイを集中的に狙いそのミスを誘う。

手段としては常套かもしれないが、ボールを取ろうとして動いているアイを見てニヤニヤしていることから単純にバレエ部ちゃんは視線によるセクハラをしているらしい……というかアイの揺れる胸しか見てないのになぜあんなに上手くプレーができるのか全く持つて謎である。

「そ〜れい!」

「…………えい！」

「なんと!？」

何回かにしてのアイに向かったボールだったが、ここに来てアイがすっかりレシーブするとううミラクルが発動した。アイのレシーブによつて浮かんだボールを俺はネット際でジャンプしスマッシュを打つ。テレビとか体育の授業で見る連中の見様見真似だが意外に上手くできて俺自身驚いた。俺の打ったスマッシュは何の偶然か真つ直ぐにバレー部ちゃんの顔面に向かうという軌道を描き、アイのプレーに驚いていたバレー部ちゃんの顔面に突き刺さるのだった。

「ぶぎやっ!？」

女の子らしからぬ呻き声が聞こえた気がした。

普通のボールより柔らかいからそんなに痛くはないはずだがパシンと結構な音が響いた。俺は大丈夫かなと不安になるが隣で飛び跳ねて喜んでるアイの姿を見てまあいいかと無理やり納得する。というか喜んでるアイだけでなく、相手チームの友達ちゃんもお腹を抱えて爆笑していることから本当に気に病む必要もなさそうだ。

ボールを持ち直したバレー部ちゃんは無言のまま元の位置に戻る。

「…………うっわ、あの日本気だ」

「マジで?？」

確かにバレー部ちゃん目の中に燃える炎が見える気がする。

どうやら俺の顔面への一撃がバレー部ちゃんの魂に火を付けたらしい。バレー部ちゃんは静かにボールを上げ、そして試合同然のように早いサーブを打ち出した。そのサーブは俺ではなく真っ直ぐにアイに向かう。結構な速度のボールにアイは慌ててレシーブの体勢に入る……が、ボールの軌道はアイの腕ではなく胸の辺りに向かっている。これは取れないか、俺も含めおそらく誰もが思っただろうがここで予想外なことが起きた。

俺の睨んだ通りボールの軌道はアイの胸に向かった。

そのままアイの体に当たって地面に落ちるかと思っただが――。

ぼよん。

『な、なんだって!?!』

俺とバレー部ちゃん、そして友達ちゃんの声が重なった。

何が起きたのか説明すると簡単だ。バレー部ちゃんのボールはアイの胸にぶつかり、その豊富な胸の弾力を持ってボールを跳ね返したのだ。思わず目を疑う光景だったが実際に起きたのだから信じるほかない。

何が起きたのか分からないアイと一発で相手のコートにボールが帰っていったので何もできない俺。

相手の友達ちゃんも同じらしくゆっくりとボールの行く末を見守っている。そんな中バレー部ちゃんはいうと……。

「まさかおっぱいでレシーブするなんて！ これは新しいレシーブだわ。おっぱいを使った新しいレシーブ——正に乳（NEW）レシーブ!!」

新しいと乳をかけて乳（NEW）レシーブってか？

言っていることはアホだが言葉掛けが上手くて感心してしまった。とはいえそんな風に相手チーム二人が動かなかったためどうなるか、簡単である。

受け手がいないため跳ね返ったボールは相手のコートに落ちる。

向こうと違い二点取れば俺たちは勝ちのため、このポイントを持って俺とアイはバレー部ちゃんチームに勝利するのだった……勝因はアイのおっぱいレシーブというつまらないものではあつたがな。

それから少し休憩しバレー部ちゃんたちは二人で泳ぎに行ってしまった、俺とアイは一緒に海を歩いていた。

アイを残しジュースを買いに行つて戻つたとき、まあ海のお約束というか何というか、アイがナンパされている所だった。幼馴染鼻屑かもしれないがナンパされてもおかしくないくらいにはアイは可愛い、それに小柄な体形に似合わない大きな胸も男の目を惹く要因だろう。

「……氣に入らない……嫉妬かねえ」

アイが男に口説かれていているのを見るのが氣に入らない。

自分で言葉に出して嫉妬だと納得して思わず苦笑すら出てしまう。俺の気持ちは一先ず置いておき、アイの顔を見るにやっぱり困っているようだ。無理やり誘われても突っぱねるほどには言うことは言うアイだが今回は少ししつこいか？

『駅でナンパしてくる人の目見ると、絶対私をホテルに連れ込もうとしてる目だよ』
しれつと以前そういつたアイに笑ったこともあったつけ。

随分と前にそういうこともあったなと思いつながら俺はアイの元に向かう。アイも俺に気づいたのか男に頭を下げてすぐにこちらに走ってきた。

「ユー君！」

「悪い、待たせたな」

「ううん、大丈夫」

そう言つてアイは俺の腕を取り自分の腕を絡ませた。

先ほどまで困り顔を浮かべていたアイが一瞬に笑顔に変わり腕も組んだことから、向こうもある程度察したようで俺に頭を下げて向こうに消えていった。

俺はその様子を見て少し拍子抜けしたが、どうやらい人みたいでアイと共に笑つてしまった。

それから買ったジュースを二人で分けて飲みながら歩く。

その間アイはずっと俺から離れることなく腕も組んだままだった。

「ユー君、こつちのジュースもいる？」

「いいのか？ それじゃあ遠慮なく……うん？」

「えへへ、間接キスだね……！」

「……」ほっ！

変なアクシデントもあつたが特に変わったことはなく時間は過ぎる。

ある程度歩き続けた場所は人目のない岩場、誰の目もなく騒がしくもなく静かな場所。俺とアイはゆっくりと腰を下ろした。

波の音だけが静かに聞こえる静寂、隣に座つたアイがこてんと頭を俺の肩に当てる。

しばらくお互いに何も言葉を発さない時間が続いた時、アイが口を開いた。

「ありがとねユー君。さっきの、助けてくれて」

「あああれか？ 置いていった俺が悪かつたのもある。ま、相手も悪そうな人じゃなかつたけどさ」

「そうだけどさ……ふふ」

「？」

小さく笑つたアイが気になって俺は視線を向ける。

肩から頭を離し、目を合わせたアイは小さく語り始めた。

「ユー君はさ。いつも助けてくれるよね。ずっと昔から、どんな時もユー君が私の傍にいた」

「……………」

「甘えすぎかなって思ってた……ちよつとユー君離れしようって思っても、そんなことできるわけなくて」

「……アイ」

「ユー君が傍にいること、私がユー君の傍にいるってこと。これがもう当たり前のような気がして」

確かにと、俺はアイの言葉を聞いて実感する。

小さい頃からいつも隣にはアイがいた。ずっとずっと一緒にいて、それが当たり前のように俺も思っていた。成長して大きくなって、大人に近づくアイにドキドキしながらも何も変わることはなかった。

「……………ユー君？」

俺の顔を覗き込んでくる彼女。

小さなことで笑い、小さなことで落ち込んだり、小さなことで怒ったり、小さなことで照れたり、小さなことで心配してくれるアイ。

いつも傍にいてくれたアイを想うとこんなにも胸が温かくなる。

ずっと幼馴染という関係、それもいいだろう。でもそれはきつとこの先何も変わらな
い。もつとその先へ、アイを特別と思うように、アイの特別にもなれるように……これ
は変わろうとしなければ絶対に変わることはないだろう。

17年間生きてきて、ようやく勇気を出せるようになるとはヘタレってやつかね。

「……アイ」

「っ……はい」

俺はアイの特別になりたい。

アイを俺の特別にしたい。

そんな想いを込めて。

「……っ!!」

俺はこの想いを君に届ける。

おわりのたわわ!

ただ一言好きだと、言葉にするのは簡単なのに伝えることがこんなに大変なんて思いもしなかった。

ずっと変わらない存在だからと気持ちに蓋を閉め、ただ一緒にいれることに甘え傍にいた。本当はずっと前から気づいていて、その先の関係を望んでいたというのに。

「……アイが好きだ」

「……っ!!」

ずっと言いたかった言葉、ずっと胸の奥に秘めていた言葉を伝えた。

目を大きく開いて驚いたような、けれども待つてくれたことが伝わるようなそんな目をするアイ。そんな中俺はとうとうと言い切ったぞと言わんばかりに楽な気持ちになっていた。伝えるまでは煩いほどに心臓が脈打っていたのに今はとても静かで、ゆつくりとアイの言葉を待つだけになっている。

波の音だけが響く静寂の中に俺とアイの息遣いだけが聞こえるそんな空間。

しばらく、おそらくは数十秒か。それくらいの時間が経ったとき、アイが口を開くのだった。

「……それは幼馴染としての好きじゃなくて、私を一人の女性として言ってくれた言葉……なんだよね？」

震える声でそう言うアイを反射的に抱きしめたくなくなったがもう少し待てと自制する。

俺は当たり前だと言う意味を込めて頷いた。俺の反応を見たアイの頬をつーつと一滴の涙が流れる。多くはないが少なくはない、そんな涙を拭いながらアイは笑みを浮かべた。俺がずっと傍で見えてきて、そしてこれからも見たいと思うそんな笑顔を浮かべて。

「ずっと待ってた。ユー君が私を好きって言ってくれるの……ずっと待ってた」

「アイ……」

俺はたぶん、いや確実に忘れることはないだろう。

誰かに告白するという瞬間、誰しもがそうだろうが絶対に忘れることはない。これはそれほど自身の魂に刻まれるほどの瞬間だと思うから。そして何より――。

「私も好きです。ユー君のことが大好き、ずっと大好きでした……っ！」

ずっと幼馴染だった女の子が、自分のもっとも大切な恋人という存在になった今を。

彼女の浮かべる輝くような笑顔、腕の中で感じるこの温もりを……絶対に忘れることなんてできない。腕の中に感じるその温もりをこれでもかど確かめるように抱きしめれば、同じように抱きしめ返してくれることの嬉しさ。優しく頭を撫でればもっとして

訴えるようにその身を押し当ててくる愛おしさ……うん、俺は絶対に忘れることはない。

「ねえユー君」

「どした？」

「私たちつてさ……これもう結婚まで秒読みだね！」

「気が早いって」

「それはそうだけど、気分だよ気分♪」

「……まあ否定はしないし将来はそうなりたいと思うけどな」

「えへへ、ユー君♪」

ちよつとばかり気が早くて、人様に見せられないほどにだらしなく笑うアイも……きつと色んな意味で忘れることはできそうにない。

——数ヶ月後——

アイに告白し、恋人という関係になったそれからは日常に更に色が付いたような錯覚を覚えた。

元々俺とアイは幼馴染として距離が近かったせいか、付き合いだしても特に振舞い方

に変化はない。精々が登校中も下校中もずっと手を繋いでいたり、いつもは外で朝待ち合わせにしていたのにアイが起こしに来てくれるようになったり……何をしているかは置いて人が寝ているベッドに潜り込んでいたり。

とはいえ特に変化がないと思っているのは俺とアイだけのようで、周りの人にはすぐに気付かれた。姉さんやアイのお母さん、妹ちゃんやバレエ部ちゃんには一瞬だったし、お兄さんや先輩さん、学校の友人たちは一瞬考えすぐ答えが出たのか納得したような表情をする始末。コンビニの徳森さんに至っては店のケーキを自腹で奢ってもらったりとそんな感じである。

「……色々あったなあ」

「なくにおっさんみたいな声出してんの」

しみじみと呟いて出た言葉、それに反応を返したのはバレエ部ちゃんだ。

今俺がいるのは学校の教室、アイが委員会の集まりでおらずその席にバレエ部ちゃんが座っているという構図である。バレエ部ちゃんは呆れたような表情でいたが、すぐに表情を柔らかくして続けた。

「まあ分からないでもないけどさ、あんな可愛い彼女ができたんならね」

何度目になるか分からない言葉な気がするが気にしないでおこう。

アイが可愛いという部分に頷くとバレエ部ちゃんは苦笑して背中を叩いてきた。女

子の力と思っていたがやはりバレエ部ちゃんのは痛い、女の子の皮を被った男なのではないかと言われても俺は信じるかもしれない。

「失礼なこと考えてる〜? 言ってみ〜?」

「ほんへもないれふ(とんでもないです)」

……本当に鋭いなバレエ部ちゃん。

ほつぺを抓られ痛い痛いと手を叩いてやめさせる。少しばかりジンジンするがまあ失礼なことを考えてしまった俺が悪いとして今回は言い返すことはやめておこう。

「普段のアイを見ていたら玉砕濃厚、今のアイを見ていたら玉砕確実……いやあ世の中辛いね」

「何のことだ?」

「あはは、アイのことだよ。あの子、すごいモテてたんだから」

まあバレエ部ちゃんと話しをすることも少なくないしアイがモテるのは知っていたことだ。

告白されたり手紙を渡されたことがあるのも何度か見たことはあるくらいだし。

「可愛らしい顔、保護欲を誘う小柄な体形、そんな体に不釣り合いな豊満な胸、そして性格は優しいときた。こんなのモテない方がおかしい」

アイを示す言葉に全面的に頷いているとバレエ部ちゃんはまた呆れたような目をす

る。そんな目をされても俺にどうしろというのか、否定はまあする気はないができないしどういった反応をしろと。

「でもみんな大方気づいてたのさ、あのアイが本当に楽しそうにいられるのはあんたの隣だけってね。だからアイに告白とかしてたのは他のクラスばかり。このクラスはみんなあんとアイのバカツプルなやり取りを見てるからさ」

「なんだよバカツプルなやり取りって」

バレエ部ちゃんがクラスの人間に視線を向ければうんうんと頷く……無駄に団結力あるなこいつら。

「……だからさ」

そういつてバレエ部ちゃんは少し真剣な顔になって続けるのだった。

「アイのこと幸せにしてやんなよ? ……まあ今も十分幸せみたいだけど、今よりもっと、もっと幸せにしてやりな。あの子の親友としてあんとお願いする」

そんなこと言われるまでもない。

そう返すとバレエ部ちゃんは満足そうに頷いて、そして少し身を寄せてアホなことをしゃべりだした。

「でも本当はアイは私が欲しかったのに!! なんだろうこの感じ……これが寝取られた気持ち!」

「お前は何言ってるんだ!」

何があるうとバレエ部ちゃんはブレない。

でもだからこそ愉快的友人であることに変わりはないのだろうか。

「でもあながち間違っていないんですよ? カマ掛ける感じで聞いたらあの子顔真っ赤にして頷いてたし。ぐふふ、その辺詳しく聞かせてはもらえんかいなユー君や」

「ドアホ」

「いたつ!」

いい加減うざかったのでチョップを額に入れておいた。

「というかアイさん何自爆してんですかね……というか一昨日妙にアイがそわそわして顔を赤くしてたけどバレエ部ちゃんにアレを追及されたからなのか。」

まあ俺から言うことではないのでバレエ部ちゃんには諦めてもらおう。

それにそろそろアイも戻ってくるだろうし——。

「ただいま、ちよつと話長くなっちゃったよ」

「おかえり〜! 所でアイさ、ユーとセツ——」

「バレエ部ちゃんちよつとコブラツイストの練習に付き合ってくんね?」

「え、ちよ……ぎやああああああつ!!」

「ユー君どうしたの!?! つて、口から魂が……」

「ふ、悪は死なねばならんのだ」

「いやいや私はまだ死にたくなくらい！」

結局こんな騒がしいやり取りは担任が来るまで続くのだった。

時間は流れ放課後、俺とアイは真っ直ぐ家に帰らず街全体が見渡せる高台に来ていた。二人揃ってベンチに座りその景色を眺めているとアイが俺に寄りかかる。こうして二人でいるとアイがこのように寄りかかってくるのは最早当たり前と言ってもいいもので、俺もいつもと同じように寄りかかってきたアイの頭を撫でる。

「……本当、幸せだなあ」

「しみじみとしてんな」

「えへへ……でも本当だもん」

アイが顔を上げて俺を見つめてくる。

そしてゆつくりと手を伸ばして頬に触れた。少しだけひんやりしていたがそれが少し心地よかった。

「こうして触れることができる、触れてもらえる、好きと言ってもらえる……それが本当に幸せ」

言葉に嘘などないように笑顔を見せるアイが愛おしくて、俺はそんなアイを抱きしめた。

応えるように俺の背にもアイが手を回す。こうして抱き合ったのはここ最近何度目か、付き合いだしてから少しの時間を見つけてはこんな風に触れ合っている気がする。

「ユー君」

「うん？」

「キス……して欲しいな」

「お願いされなくてもするよ」

そういつてアイに口づけをする。

一度離れては、また近づき、また離れては近づきと……本当に俺は馬鹿みたいにアイが好きなんだなと実感する。アイの温もりを感じて幸せな気分になり、心がポカポカと熱を持つ。暫くそうしていたが、いい時間になったので名残惜しいが顔をアイから離す。

アイの方は切なそうにしていたが、すぐに表情を切り替え笑みを見せてくれる。

「……これ以上続けると私が我慢できなくなっちゃいそうだし、帰ろうかユー君」

恥ずかしそうにはにかむその姿、いつ見ても俺をドキドキさせる仕草をしてくれる。

お互いに手を繋ぎその場所を後にして帰路に就く。おそらくこれから数えきれないほどの時間をアイと一緒に過ごすのだろう。こうして手を繋いで歩くのもそうだし、遠くに出掛けるのもそう……多くの時間と共に多くの思い出を作っていくはずだ。

「アイ、ずっと傍にいてくれ」

「うん。ずっと傍にいるよ。それこそ嫌だと言われてもね♪」

アイを想い、アイに想われ、こんな幸せな日常を歩き過ごしていく。

愛する存在が隣にいることの幸せ、それを噛みしめ俺とアイは傍に居続けるのだった。

「そういえばユー君」

「なんだ？」

「私たちさ、この前大人の階段上ったけど」

「お、おう……」

「ふふ、もう一つ……実は大人の階段を上ったのでした」

そういつてアイは胸を張る。

アイの動きに合わせてぼよんと豊満な胸が揺れた。

そういえば前に言ってたっけ、また胸が大きくなったような気がするって。俺の予想を裏付けるように、アイは教えてくれるのだった。

「Iカップ改め、Jカップになりました！」

……とりあえず一言言うなら。

俺の幼馴染はたわわでした……ってか？

番外編

アイちゃんと身体測定

その時アイに戦慄が走った。

「う、うそ……っ!？」

信じられない、そのように目を見開く先にあるのは体重計。女子にとってデリケートな体重と言うデータ、アイが乗った体重計の示す針の先にある数字は——50。

「……な、何かの間違いです。もう一回!」

アイは一回体重計から降りて再び乗る。

けれども現実は無慈悲、いくら乗りなおしたからといって体重が変わることはない。数字に絶望し硬直するアイの姿に、担当の先生は「何を大げさな」と呆れた視線を投げかけていた。そのような視線を向けられたことでアイも悔しそうに顔を歪めるのだがここで一つ、ビビッとアイの頭の中を一つの閃きが駆け巡った。

「…… (クイクイ)」

「うん? …… ああ」

アイは背後に控えていたバレエ部ちゃんに指でこつちへ来いと合図をすると、バレエ

部ちゃんは何かを察したのかゆっくりとアイの背後に立った。アイとバレエ部ちゃんをよく分らない行動に、先生と周りの女生徒たちは何事かと見守っている。

果たしてアイは何を思いついたのか、そしてそれは定められた体重の数字に変化を及ぼすことができるのか。

話し声は消え去り齎されたのは沈黙と言う名の静寂、小さく緊張の息遣いだけが聞こえるそんな場所で、アイとバレエ部ちゃんは動き出すのだった。

「手を」

「ははあ」

アイがそう告げると、バレエ部ちゃんは静かに腕を突き出しアイの背後からその胸へと向ける。

優しく、壊れ物を扱うかのようにバレエ部ちゃんの手がアイの豊満な胸を支えその重みを一手に引き受ける。重力に従い重さという概念を付与されていたバストはそれを超越し、重さから解き放たれた現実はアイの乗る体重計にも影響を及ぼす。

50を刺していた針はゆっくり動き、その動いた針は45を刺して止まった。

定められた体重の数字を変革することに成功したアイは言葉に言い表せない達成感を感じる。5キロもの重さが下がり45という数字は納得のものである。やり切った表情のアイ、クスクスと肩を震わせているバレエ部ちゃん、目の前で行われた奇跡に拍

手を贈る女生徒たち……けれども残念かな、先生だけは違った。

目の前で行われた奇跡を全否定するかのように、先生は無慈悲な言葉を告げるのだった。

「駄目に決まってるじゃないの。はい。50つと」

「……ですよね〜」

大げさな前振りだったが何も変わらないう、これが現実なのだから仕方ないのだ。

しかし実際の話アイの胸を持ち上げて5キロもの重さが減ったという事実だが、女性のバストはJカップほどの大きさがあるとおよそ5キロほどの重さがあるらしい。普段ブラで支えているとはいえ、5キロの重さを首の下に抱えて生活しているという……それは肩が凝ると言うのも納得の話である。

「あくあ、結局変わらなかつたあ」

「まあしょうがないでしょうに」

身体測定が終わり教室へ帰る途中アイが小さく呟きそれにバレ部ちゃんが答える。

気を落としているアイにバレ部ちゃんはニヤニヤしながら続けた。

「でもすごく成長しているということですか。ユーに揉まれ愛されてるならそりゃ大きくなるってやつかねえ」

「ちよ、ちよつと廊下で何てこと言ってるの!」

いきなりのバレエ部ちゃんの発言にアイが顔を真っ赤にして声を荒げる。とはいえアイにとつて幸運だったのか周りに人はいない、今のバレエ部ちゃんの発言は特に誰にも聞かれてはいなかった。その事実にはホッと一息吐いたがすぐにアイはバレエ部ちゃんとキリッと睨みつける。睨みつけると言っても本気ではないのが分かっているでバレエ部ちゃんは笑みを崩さない。

「……全くもう」

そんなバレエ部ちゃんにアイも苦笑し諦める他なかった。

アイが一先ず落ち着いたくらいで、バレエ部ちゃんは少し真面目な顔になって話し出した。

「けど前の身体測定の時よりは明らかに大きくなってるよね」

またその話するの？ そんな言葉がアイの瞳から伝わってきたバレエ部ちゃんだったがどうなのと続きを促す。ここまで来ると決してバレエ部ちゃんが譲らないのはアイ自身分かっているので素直に答えることにするのだった。

「……確かに1カップ大きくなっただけ」

「やっぱりねえ。微妙に重さが違うと思ったのよ」

「重さが分かるって……呆れればいいのか凄いなと思えばいいのか」

自信満々なバレエ部ちゃんに今度こそアイは呆れたような視線を向けた。

確かにバレエ部ちゃんに答えたようにアイはIカップからJカップへと成長した。胸の重さで肩凝りに困ることも少なくともはない。そして何より学校では男子生徒が、外では大人を含めた男性たちが自身の胸に視線を向けてくることもあつて正直……アイは自身の持つ豊満な胸があまり好きではなかった。

「……好きじゃなかったんだけどな」

「？」

ボソツと呟いたアイにバレエ部ちゃんは首を傾げる。

そんなバレエ部ちゃんの視線に気付かずアイは恋人であるユーのことを思い浮かべた。ユーに対して胸を押し付けたりすると顔を赤くして照れてくれる、大きな胸を魅力として真っ直ぐに受け取ってくれる……そして何より、ユーが顔を赤くして巨乳は好きだと言った時、アイは初めて自身の胸に感謝をした。

大きすぎるこの胸でもユーが喜んでくれるのならいいかなと……そして当たり前だがこの胸を見せる相手など一生を通してユーしかいないとアイは思っている。勿論胸だけでなくアイの多くを好きだと言ってくれるユーに対してアイは既に限界を感じさせないほどの愛情を抱いていた。

「……うふうふう」

「アイ……？」

両頬に手を当てて顔をだらしなくしているアイ。

バレエ部ちゃんとは一体どうしたのかと心配になるが、明らかにここにはいないユーのことを考えてトリップしていることが分かったのでやれやれと苦笑するだけだった。

トリップしているアイにバレエ部ちゃんは何を思いついたのかこんなことを囁く。

「エッチの時はやっぱりその胸を使ったり……?」

普段ならそんなこと答えるわけもないのだが、今のアイはすっかり油断していた。

「えへへ、優しく挟んであげて口も一緒に……はっ!」

そこで何を口走ったのか気づいたのか一気にアイの首から顔にかけて真っ赤に染まる。

赤い林檍のようになってしまったアイは小さく俯き一言――。

「忘れて……今言ったことは綺麗さっぱり忘れて」

そこまで言われてしまったのはバレエ部ちゃんもニヤニヤ笑いはしても追い打ちを掛けようとは思わなかった。

けれど、バレエ部ちゃんと思う。アイは今まで本当に可愛らしかったが、ユーと付き合いだし幸せな日々を送る中でその可愛らしさは更に磨きがかかった。恋をすれば人間は変わるし綺麗になる。雑誌かテレビかは忘れたがそんなことを聞いたなどバレエ部ちゃんは思い出した。

「……恋人かあ、アイを見てると私も欲しいなって思っちゃうかな」

少しだけ、バレエ部ちゃんはそう思うのだった。

アイはそんなバレエ部ちゃんに一瞬驚いたが、すぐに良い恋人ができて幸せになってほしいと願う。例えばどんなにかかわれたとしても、弄られてしまうことがあったとしても、アイにとってバレエ部ちゃんは自慢の親友であることに変わりはないのだから。

「きつと素敵な人が現れるよ」

「そうかなあ……うん。アイがそう言うなら信じてみようかな」

親友とは素晴らしいものだ。

その縁は決して切れず、いつまでも続いていくもの……アイはそんな確かなものを感じバレエ部ちゃんの幸せを願うのだった。

「あ、ユ一君！」

「終わったの？」

「うん。一緒にいこ」

「おう」

「胸焼けしそう……私はあんな風にはなれそうにないなあ」

……恋の仕方、付き合い方は人それぞれである。

アイちゃんとお正月

お正月、学生にとつては冬休みの時期に入り長い長い休暇の日々である。

例年通り正月とはいえ休みの日なので正直いつもなら昼頃までベッドの住人と化しているはずなのだが——俺は隣を見る。

「……………あむ」

俺の隣にピタツと引っ付き炬燵に足を入れてみかんを摘まんでいるアイの姿があった。

正月早々どうしてアイが俺の家に……………なんて特に珍しいことではない。昔からよく遊びに来ていたし俺もアイの家にお邪魔してお雑煮をご馳走になったりもしていた。無論今年も元日は朝早くから初詣に向かい、姉さんと共にアイの家にお呼ばれたのでお邪魔になり先も言ったがお雑煮をご馳走になった。

「……………8時か」

俺は時計を見て小さく呟く。

8時というのは学校がある日からすれば遅刻完璧な時間ではあるものの、今日みたいな休みの日にこの時間に俺起きていること自体かなり早い。詳しく説明するならばア

イは確かに遊びに来ている。ただし今日の早朝から訪れたわけではなく昨日泊まる形
でだ。

寝坊助な俺と違いアイは朝に強い、それもあつてアイに合わせて目を覚ました結果今
の状態になっているわけである。

本音を言うならば眠たい、少し横になればすぐ眠れるくらいにはまだ眠気がある。だ
けど俺の隣にいる大事な恋人のことを考えるなら……そんな失礼なことをしたくはな
かった。まあおそらく……いや確実だろうけど俺がここで寝たとしてもアイは怒らな
いだろう。寧ろ喜んで膝枕としてくれそうだが今は何より、アイと一緒にこの瞬間を
しっかりと楽しみたいと思う俺の気持ちが強いのかもしれない。

「……………」

「…………… どうしたの?」

ジツと見つめればどうしたのと首を傾げるアイ。

そんなアイが可愛いと感じ、いつもしているようにその頭を撫でる。すると目を細
め、更に体を密着させて頭を手に押し付けてくる。そんなアイの姿がまるで猫のよう
に感じてしまい、ついつい言葉に出してしまった。

「なんか猫みたいだな」

「えへへ、そう? うーんと、それじゃあ——」

そう言いながらアイが炬燵から出る。

何をする気だろうと俺が見ている中、アイは手と膝を付き四つん這いのような格好になる。それはまるで俺が先ほど口に出した猫のようなポーズだ。

「……えつと？ アイ？」

「にゃ〜ん。なんてね♪」

片腕を頭の前に持ってきてポーズ一つ。

どうやらアイは猫の真似をしているつもりのようなのだ。アイはゆっくりと俺の傍ににじり寄り、俺の頬に手を伸ばして一言こんなことを口にする。

「今から私はユー君だけの飼い猫にゃん♪ たっつくさん可愛がって欲しいにゃあ」

「え、ちよ!？」

そう言つてアイは更に俺との距離を詰めてキスができる距離にまで近づいてきた。

そのままアイは俺の頬に顔を近づけペロツと舐めてきた。その瞬間何とも言えない感覚、言葉にするならくすぐったさのようなものが突き抜ける感覚だ。冬とはいえ炬燵に入っているためそこそこ温まっているはずだが、それでも今の感覚は少なくとも俺の背筋を震わせるには十分だった。

今の震えもアイに伝わったのか舌なめずり一つ、そして妖艶な流し目と言うのか、そんな表情を俺に向ける。

「ふふふ、ユー君可愛い。もっと舐めちゃうにゃん♪」

再び顔を近づけるアイに俺は思う。

これは断じて猫ではないと。これはあれだ……標的をロックオンした豹にしか見えないと。ジリジリと近づいてくるアイに対しどう反応するか考えはするものの、まだまだ俺も若いのかアイにいいようにされるのは何となく我慢ができなかったのだ。近づいてきたアイに同じように顔を向け、その勢いのままアイの唇に自身の唇を押し当てた。

「っ!?!」

いきなりの俺の行動にアイは目を大きく開いて驚くがもう遅い、とあるアニメの台詞を使うならここからは俺のターンというやつである。驚くアイに内心で苦笑し、そのまま唇を割る様に舌を押し入れる。アイからくぐもったような声が漏れだすがそれでも続けていると、今度はアイからも舌が伸びてきた。

吸い付くように求めるアイから一旦顔を離すと、アイの目は既にトロンとだらしなくなり息も荒かった。

「羨けのなつてない猫には仕置きが必要か？」

……俺は一体何を口走ってんだと殴りたい衝動に駆られる。

それもこれもアイがいきなり猫になるとか言い出したのが悪い、まあそれに悪乗りし

て今のこんな状況にした俺の方が悪いのだが。

俺の言葉を聞いたアイは小さく頷き口を開く。

「私は悪い猫、だからユー君の思うままに舐けて？ いっぱい、いっぱい舐けて？」

そう言うアイに一気に襲い掛かりたい衝動が俺を襲う。

けどアイはもしかしたら忘れているのかもしれない。今いる場所は俺の部屋ではなくリビング、そして昨日会社の飲み会があった姉さんがまだ寝ていて家にいると言うことを。

既にスイッチが入ったアイが寝そべり俺を待っているが、アイに比べて冷静な俺は気付いている。リビングと廊下を隔てる扉の向こうから足音が段々と近づいてきていることを。

「……アイ？」

「ううユー君……」

……お願いだからそんな切なそうな声を出さないでくれ、いや俺が悪いんだけどさ。

乱れて少し服が乱れ、気のせいか胸の先端に浮かび上がるものが見える気もするがそれは今置いておこう。アイを抱き起して座りなおすと、アイはゆつくりと顔を近づけてくる。

俺とアイの距離がもう少しで0になるそんな時に、扉が開いて足音の正体が入室して

くるのだった。

「ふわあくー！ いやあくよく寝たよ。あ、ユ一君にアイちゃんおはよう」

「うひゃつ!!」

「……………？ アイちゃん？」

「あ、あはは……………えつと、おはようございませ……………」

姉さんの登場に流石のアイも気持ち切り替えたようだ。少しかだけ涙目で俺を睨んでいるような気もするが本当にすまない、ちゃんと後で相手するからと耳打ちすると顔を赤くしながらもしっかりとアイは頷いた。

「……………うう、下着がひんやりして気持ち悪い」

「下着？」

「いえいえ!! なんでもないんです！ それよりもお姉さん、お雑煮食べます？ 温め

てますよ？」

「本当!? それじゃあいただこうかな」

アイが立ち上がり台所へ向かう。

そんな中姉さんが寒いと口にしながら炬燵へ足を入れた。俺はそんな姉さんの様子、正確にはその姿を見て小さく溜息を吐いた。

たぶん寝ている時に無意識に外したのかパジャマの胸ボタンが外れてそのたわわな

胸の谷間が丸見えなのだ。今ここにいる俺は弟だし、アイに關しても妹のように接しているのて別に見られることは毛ほども気にしていないのだろう。

そんな風に姉さんをジッと見ていると、俺の視線に気付いたのか姉さんはニコツと笑みを浮かべる。家族鼻根に聞こえるかもしれないが姉さんは美人だ。それこそアイとはまた違ったベクトルで愛らしさというか何というか、とにかくそんなものを感じさせる。これでどうして今まで彼氏がいないのか疑問に思うこともあったが、まあこの姉が天然でありガードが思いの外固いというのが理由だろうか。

「どうしたの？ そんなにお姉ちゃんをジッと見て」

「……いや、なんで姉さんには彼氏ができないのかなって思ってた」

思わずそのまま口にしてしまったが姉さんは小さく笑うだけ。

それからアイがお雑煮を持って戻ってきたが俺の隣に腰を下ろす。餅をゆっくり味わいながら食べている時、姉さんがゆっくりと口を開いた。

「ユー君とアイちゃんを見てると……恋愛っていいなって思っちゃうな」

その言葉に俺とアイはいきなりすることに目を合わせた。

俺とアイの反応が面白かったのか姉さんはクスクスと笑い続ける。

「仕事が忙しくてそんなこと考える暇ないって思ってた。でもそんな仕事の中で、いつも支えてくれて励ましてくれる人がいる」

「……それって」

いつにも増して優しい表情で語る姉さん、少し頬を染めているその姿は間違ひなく誰かを想う故の表情だと俺は気付いた。そしてそれは隣にいるアイも同じようで、俺はそんな姉さんが想う相手は分かっているけれど敢えて聞いてみた。ほぼ確信を持っている俺の問いに姉さんは照れくさそうに笑いながら頷くのだった。

「うん。もしこの気持ちに恋だとするならば……私はすっかり恋しちやつてるかな——先輩に」

やつぱり、姉さんの想い人は先輩さんだ。

まあ分かってはいたけれど、こうして本人の口から聞いたことで安心というか何というかだ。それから言葉少な目に姉さんがお雑煮を食べ終え、先輩さんとお出かけするからと言って準備に取り掛かった。その姉さんの様子はとても楽しそうで、これは案外すぐに姉さんと先輩さんの交際宣言……気が早いかもしれないが結婚報告も聞けるのではないかと思う俺である。

「ふふ、お姉さんの恋……上手く行くといいね」

「上手く行くさきつと。姉さんと先輩さんなら間違ひない」

姉さんは先輩さんを想っている……そして俺が見た感じだとたぶん先輩さんもきつと——。

化粧を済ませ身支度を整えた姉さんが笑顔で出ていくのを見送り、俺はアイと共に再び炬燵の住人と化するのだった。

「……ユー君忘れてる？」

「いや、部屋行くか」

「うん♪」

「この後思いつきり可愛がりました。」

妹ちゃんから見たお兄ちゃん

「……狭いですね」

「まあな。でも俺とアイは毎日こんなんだよ」

とある日の朝のこと、アイお姉ちゃんの妹である私はその彼氏さん——もう私にとっても家族同然、お兄ちゃんのような存在であるユーさんと共に電車の中にいた。

どうしてユーさんの傍に居るのがお姉ちゃんではなく私なのか、それは単純に今日お姉ちゃんはバイトであるのと、私の出かける先の近くにユーさんも向かうと知ってどうせなら途中まで一緒に行こうかと言う話になったのである。ユーさんの傍に誰か他の女の人がいることに対してお姉ちゃんは少しだけ嫉妬はするものの、そこは妹である私だったせいか特に何も言われるようなことはなかった。

正直以前までの私は少しばかりお姉ちゃんに対して独占欲強すぎではないかと思っ
ていた……だけど。

「……………」

今までユーさんと接してきたこと全部思い返してみれば、お姉ちゃんがユーさんのことをあそこまで好きになるのも当然かと思った。ずっと昔からユーさんを知っている

けれど、ユーさんはいつもお姉ちゃんを守り傍にいたような気がする。もちろん何から何までお姉ちゃんだけを優先するわけではなくて、家族ぐるみの付き合いがあるのもあつて私に対してもユーさんは優しくかつた。

一緒に遊んでくれるのが楽しくて。

何か辛いことがあつたときに慰めてくれるのが優しくて。

勉強を教えてくれることが頼もしくて。

……ふいに頭を撫でてくれることが嬉しくて。

その時を思い出すとついつい頬が緩んでしまい熱くなる。

もし……もしもだ。

私がお姉ちゃんよりユーさんと長く接していたら、ユーさんの隣にいたのは私だったのだろうか。

「……ありえないよね」

ありえないIFを考えてすぐに私は苦笑してそれを否定した。

でも少しだけ寂しさを感じるのは果たしてお姉ちゃんをユーさんに取られてしまつたことか、それともその反対か……。

少し暗くなつた私、そんな私の頭を何かが優しく撫でる。

私はそれが何なのかすぐに分かつた。それはユーさんの手、優しく……落ち着かせる

ようにユーさんが私を撫でているのだ。

「どうかしたか？」

「……ふふ、何でもありません」

……ズルい、ユーさんはいつもズルい。

普段何で女性は鋭いんだと言っているくせにこういう時のユーさんこそ鋭い。一瞬こうまで自分の状態を見透かされてしまったことにムツとしたけれど、頭を撫でてもらっている感覚、そしてこの瞬間に身を委ねたくなってしまうってどうでもよくなった。

「なんでもありません……けど、もう少し撫でてくれませんか？」

「うん？ ……了解だ」

ユーさんは少し首を傾げていたけどすぐに笑って撫でるのを続けてくれた。

ああでも今の私ってとてつもなくチヨロイ女みたいで少し嫌だな。嫌だと思ってもユーさんの温もりに触れていると本当にどうでもよくなってしまふあたり漫画で言うチヨロインだ私は。

お姉ちゃんも結構なものだが……うん、やはりお姉ちゃんと私は姉妹だということだろう。血は争えない。

「……えい」

小さく声を振り絞り、思い切ってユーさんに引っ付いてみる。

同年代の中ではかなり大きいと方だと思っっている胸がむにゆりと形を変え、そこその圧迫感を感じるが少なくとも触れている相手がユーさんという点は嫌ではない。寧ろ安心する気がする……なるほど、お姉ちゃんがユーさんに触れていると安心できるとはこういうものなのか。

お姉ちゃんから聞いていた話を実際に体験しているその時、ユーさんが苦笑しながら私に視線を送っていた。

「どうやら私は無意識ながらユーさんにスリスリしながら甘えていたらしい。」

「妹ちゃんは少し甘えん坊だよな」
「えへへ、未来のお兄さんなんですからいいじゃないですか」

ユーさんがお姉ちゃんと結婚すれば義理ではあるけれどユーさんは私のお兄ちゃんになる。

結局それが早いか遅いかの話なので、こうしてユーさんに甘えるのも未来の妹である私にとっておかしな話ではないのだ。

それにしても……と。

私は今の状態を考えながらユーさんの顔を見上げてみる。

こうして私という女の子と密着し、あまつさえ胸をこんなにも押し付けているというのにユーさんは特に慌てていないご様子。たぶんだけどお姉ちゃんとずっと同じよう

に電車の中で過ごしていたせいか耐性が付いてしまったのだろう。少しでも慌ててくれれば私としてもからかい甲斐があるというものなのだが……少し残念である。

でも少しだけ、ユーさんが困る顔を見てみたいなど……私はとあることを口にする。

「そういえばなんですけど」

「？」

首を傾げたユーさんだけに聞こえるように、私はそつと囁くのだった。

「うちでお姉ちゃんとエッチするのをダメというわけではないんですが……少し声を抑えて欲しいとお姉ちゃんに伝えてくれませんか？ 私とお姉ちゃんの部屋って壁が結構薄いんですよ」

「なっ!？」

私の言葉にユーさんの顔が赤く染まった。

少しばかり話題が意地悪かなと思っただけどそこは許してほしい。だってユーさんがいつも通りにしているから悪いのだ。私は少しだけドキドキしているのに、ユーさんはいつも通りだから……だから少しだけ困らせたくなくなっちゃったのだ。

「……えっと」

「……ふふ」

その狼狽えようが可愛い。

今の私はとても悪い笑顔を浮かべているに違いない。でも改めて言うが私は別にユーさんとお姉ちゃんに家でエッチをするなど言っているわけではない。恋人同士なら愛し合うのは当然のことだし、お姉ちゃんみたいな可愛い人が彼女でもし私が男で同じ立場なら絶対我慢できないと思うからだ。

……何度目か分からないが別にエッチすることはいいのだ。

ただもう少し私としては声を抑えて欲しい、するなら静かにして欲しいと言うのが本音。ユーさんの困り顔を見たいからとこのような話題を振ったが部屋から聞こえてくる声には「ああ始まったかあ。下でテレビ見よう」といつもリビングに降りる羽目になるのだ。

「……それに関しては申し訳ない」

「謝るほどじゃないんですけど……する前に部屋に来て今からするからなんて言えるわけでもないですし」

「そりやそうだ」

お姉ちゃんと遊んだりするならユーさんの家で……なんて言えるわけではない。そうなったらユーさんはうちに来てくれないから私が寂しいもん。

まあこれは今後の課題というやつだろう。

別に隣の部屋から声が聞こえても私は恥ずかしいだけで我慢しようとしたらできる

と思うけど……。

私はそう考えながらついこの間を思い出した。

『ああ……っ！ ダメ……ダメえ……そこクリクリしちやいやあ……っ！』

『奥に来てるのお……っ！ ユー君のたくさんちようだい……っ！』

「……あかんでこれ」

思わず声に出してしまった。

ダメだ、改めて思い出したがこれは我慢できそうにない。もしこれを隣の部屋で平常心で聞き続けられるならその人の精神は鋼以上だろう……はあ。

「妹ちゃんから直にそういうこと言われるのは堪えるな……悪い、俺もアイも気を付けるよ」

「お願いします……あ、でもー」

「どうした？」

少し不安になって私はこう問いかけるのだった。

「……うちに来る回数を減らすのはやめてください。……私が寂しいですから」

きつと今の私はとても赤くなっていると思う。

こんな顔を見られるのがいやで思わず顔を伏せたが、そんな私の頭をユーさんが撫でてくれる……本当に落ち着く優しい撫で方だ。

「大丈夫だよ……まあ色々と気を付けるけどさ、いつもみたいに何気なくお邪魔させてもらおうよ」

「……………ふふ、はいー！」

ユーさんの言葉を聞いて安心した。

「……………やっぱり自慢だよね」

結構前になるけど学校で兄のような存在がいると友達に言った時、その友達がどんなお兄さんなのと聞いてきたことがあった。その時私はこう答えたけど、今になってもやっぱりその時の言葉は何一つ変わりはしない。

ユーさんは私にとって自慢のお兄ちゃんだ。

目的の駅に着き私とユーさんは別れる。

でもその夜、私は少しお姉ちゃんに自慢するのだった……………色々。

アイちゃん、と昼休み、そして……

「ごちそうさまでした」

「はい。お粗末様でした」

今日も今日とて学校の日の昼休み、俺はアイと共に中庭のベンチで弁当をご馳走になった。ご馳走になったという言葉と、アイのお粗末様という言葉通りこの今日食べた弁当はアイの手作りである。普段は姉さんが弁当を作ってくれるのだが、こうしてたまにアイが俺のために弁当を作ってくれる日が付き合いだしてから増えてきた。頻度としては決して少なくはなく朝大変だろうと思いつつアイに聞いたのだが、帰ってくる言葉はいつも同じ。

『花嫁修業つてやつだよ。いずれ……ね？　結婚とかしたらお弁当は毎日作ってあげたい。それに……お弁当に限らずユー君にはいつでも美味しい料理をご馳走してあげたいからね♪』

結婚は流石にまだ早すぎるのでは……と聞きたびに考えてしまうことだがそんなアイが愛おしくてたまらなくなりいつも抱きしめてしまう。言葉もそうだが文字通り花の咲いたような笑顔も見せられてしまつては、俺にアイの好意を断る勇気なんて一生持

てそうにない。

こうやってアイが俺を溺れさせようとしているならそれは策士と言えるだろう。俺はどうしようもない程に、アイという存在に溺れてしまっているのだから。

「どうしたの？」

ジツと見つめていればどうしたのかと可愛らしく首を傾げてくるアイ。

そんなアイの様子に知らず知らず笑みが浮かんでいるのが分かる。俺はアイの頭をゆつくり撫でながら、何でもないと告げるとアイは「そっか」小さく呟き、俺に身を預けるように寄りかかってきた。

こうしてアイと一緒にいる時間、家でも学校でもどんな場所でも俺は好きだ。

学校の中庭という場所であることからもちろん俺たち以外にも人はいる。こうしている今でもそれなりに多い視線を感じてはいるが、俺がアイを撫でるのをやめることはない。色々と吹っ切ってしまったのか恥ずかしさをあまり感じないのもあるが、やめてしまうとアイが物足りなさそうに見上げてくるという凶になり結局また撫でてしまうからだ。

時間の進みを忘れ、しばらくそんなゆつたりとした時間を過ごしていた時——アイがぼそつと呟いた。

「……幸せすぎてちよつとこの先が不安になっちゃいそうだなあ」

俺とアイの距離はほぼ無いに等しい、だからこそアイのその言葉はしっかりと俺の耳に届いていた。

そんなアイの言葉を聞いた俺は続くように答える。

「ならその不安が不安でなくなってしまうくらい幸せでいっぱいにしようぜ？」

「え？」

「そうすりゃきつと不安なんてもんはあつちから逃げていくさ」

理屈もヘツタクレもない言葉だが、俺としてはこう考える他ない。

言葉はさておき俺の伝えたいことはしっかりと伝わったのかアイは小さく頷き、腕を伸ばして抱き着いてきた。心地よい温もりと柔らかさがアイを通して伝わってくるそんな状態でアイが口を開いた。

「……そうだね。いっぱいいっぱい幸せな時間を過ごそう。不安になんてならないくらい、私をたくさん包んでほしい」

そんな言葉を聞いて俺はとりあえずと前置きをしてアイを抱きしめる。

「とりあえず抱きしめてみた」

「えへへ、もつと強く抱きしめて」

痛くないようにギュッと抱きしめれば、同じようにアイの腕の力も強くなりお互いに強く抱きしめ合う形になる。こういった体勢になるといつも思うのだが、本当に飽きな

いなと俺は内心で苦笑を零す。

「アイはこうするの好きだよな」

「うん、大好き。その相手がユ一君だからもともと大好き」

アイから伝えられるストレートの好意に少しだけ恥ずかしくなってしまう。

少しだけ照れた表情を俺はしているのだが、生憎とアイはそれに気づくことはなく更に言葉を続ける。

「す〜き、好き好き大好き♪ ユ一君も私のこと好き？」

完全に顔が蕩けてしまっているアイがそこに出来上がっていた。

俺はそんなアイの問いかけには当然のことながら頷くしかないわけで、そうした場合アイが更に機嫌を良くして更に密着してくるのもいつも通りと言えども通りだった。

「このまま寝ちやいたいくらい」

「残念だけでもうすぐ昼休みは終わっちゃうなあ」

「……おのれ授業め、私とユ一君の時間を引き裂くなんて許せない」

「なんじゃそりや」

アイの言葉に笑ってしまったがこの時間が永遠に続いてほしいと思っっているのも本音である。しかし俺たちは学生の身であり学校に来ている以上これは仕方ないことだ。

まあアイにしても本気で言葉に出したようなことを思っているわけじゃない……と思いたい。

そろそろ教室に戻って午後の準備をしないと行けないのだがアイが俺から離れる気配がない。

「アイさんや、そろそろ戻らんと」

そう声を掛けるとアイは小さく溜息を吐き、そしてこう言葉を掛けてきた。

「それじゃあ後10秒抱きしめてよ。それで午後も頑張るー!」

そんな言葉に俺は抱きしめる力を強くすることで答えるのだった。

それからきつちり10秒、ずっと抱きしめられていたアイは名残惜しそうに俺から離れ立ち上がる。そうして2人揃って教室に向かう途中、中庭に設置されている缶入れを見てアイが一言呟いた。

「あれ、なんかコーヒーの缶ばかり捨てられてるね。みんな眠たかったのかな?」

アイの言葉に導かれるように見てみると、確かにいつもはジュースやその他で溢れているはずなのにコーヒーの缶が多かった。それを見て俺とアイは互いに首を傾げ、どうしてそうなったのかの真相も知らぬまま二人揃って仲良く教室へ戻るのだった。

「珍しいこともあるもんだな」

「不思議だねえ」

時間は飛び夜である。

今日姉さんが会社の飲み会で遅くなることは分かっていたため、例によつて例の如くアイの家で晩御飯をご馳走になったのだ。

晩御飯を食べた後アイのお母さんや妹ちゃんを交え談笑し、その後アイと少しだけ二人つきりで過ごした帰りのため時間も22時と少し遅くなつてしまった。暗くなつた夜道を歩きながら自宅へ着くと、家の電気が点いていることに気付く。

「なんだ……今日は早かつたのか？」

そう考え玄関に入ると姉さんの靴と先輩さんと思われる人の靴が一つ、どうやらいつもより気持ち早く終わつていつも通りに先輩さんに連れて帰つてもらつたのだろう。そう思い玄関で靴を脱ぎ、そのまま廊下を歩きリビングに通じる扉を開けようとした正にその時だった。

「……好きなんです。先輩のことが……好きで好きで仕方ないんです！」

少しだけ酔っているような声だが、その言葉を伝えようとする意志はしっかりと感じ取ることができた。

扉に開けようとしていた手に脳が反射的にストップをかけ動きが止まる。俺自身の

動きが止まっても扉の向こう側、姉さんと先輩さんの時間が止まることは当然のことながらでない。

「憧れだったんです。でも……先輩の優しさに触れて、一緒に仕事をしていく中で段々大きな存在になっていたんです。お酒の勢いと思われるかもしれませんがそうじゃない……私……私、本気なんです！」

涙声になりながらも必死に想いを伝える姉さんの声が響く。

今帰ってきた俺としては一体どんな流れでこんなことになったのかは分からないが、とりあえずはと混乱している頭で俺はスマホを使ってアイにlineを飛ばす。

『……姉の告白現場に遭遇、俺はどうしたらいい？』

そんな俺のメッセージに帰ってきたアイの返事、それは――。

『え？ どういうことなの!？』

その返事も至極普通の言葉だった。

正直予想外な場面に直面してしまったこともあつてか俺はリビングに入ることができず、再び玄関に向かい靴を履いて外に出る。

すっかり冷え切った外気が頬を撫でる中、俺はゆっくりと歩き出した。

「……とりあえずコンビニ二行こう」

少し時間を潰して帰ってこよう、そう思い俺はコンビニへと向かう。

……とはいえ、だ。

予想外のことでは驚いたが、姉さんのあの言葉は勢いもあつたかもしれないが紛れもない本心だというのは嫌でも分かることだった。

俺は姉さんの想いが先輩さんに届くのを祈り歩みを進めるのだった。

アイちゃんも盛大な夢落ち

幸せに満ち足りた日々、私こと——アイにとつて正に今がその瞬間だった。

幼馴染のユー君と正式に付き合ひだして多くの時間を過ごしてきた。ユー君と過ごす日々は本当に幸せで、温かくて、楽しくて、ずっと前からユー君のことが好きだったけどもつともつと好きになる時間だったと思う。

高校を卒業して大学に入り、そして大学も出た後は早速籍を入れて私とユー君は夫婦となった。結婚したと言つても特に何かが変わるとかそんなことはなくて、相変わらず私はユー君の傍に居るといふ幸せに包まれていた。そして——。

「……あ、今動いたか？」

「そうだね、ちよつと叩いたかな」

私のお腹には一つの命が宿っている——私とユー君の子供だ。

母になる感覚……というのはまだまだ実感がないけれど、自分のお腹の中に新しい命が生まれたというものに関しては新鮮な感覚で、更にその命がユー君との愛の結晶だと考えるとそれだけで幸せに思えるから私は単純である。

お腹が膨れてからあまり体に負担を掛けることはできないため、ユー君は率先して私

を助けてくれる。もちろん妊娠する前もユー君は私のことをたくさん考えてくれていたが、ここ最近はそのが顕著である。少しだけ過保護過ぎないかと思わないでもないが、私はそれに異を唱えることはしないのだ。だって他でもない、私がユー君を独占できている時間なのだから。

「……………どうした？ いきなり笑って」

「え？ ……ふふ、なんでもないよ」

どうやら苦笑いとして表情に出ていたようだ。

まだどうしたのかと首を傾げているユー君に寄りかかる様に身を寄せる。肩に頭を乗せるようにすれば、いつもと同じようにユー君の手が私の頭を優しく撫でる。もう十分に大人な私だけど、ユー君に撫でられるこの感覚は本当に飽きないほどに大好きだ。

そして何か求めるようにユー君の瞳を見つめれば――。

「……………ちゅ」

こうやってキスもしてくれる。

もちろん今は体に負担を掛けられないのでその先はできないが、やっぱりこれだけでも幸せなのである。でもこんな幸せを感じていて一つだけ、別に心配ではないけど心配だと思ふ矛盾した気持ちを私は抱えていた。私はユー君を見上げながらこう言葉にするのだった。

「ねえユー君」

「なんだ？」

「……お腹の子が生まれても、私を変わず愛してくれる？」

お腹の子が生まれても変わらず私を愛してくれるのか、そんな不安だった。こんなことを考えてしまうのは母親失格なのかもしれないけど、子供が生まれても今までと変わらず、寧ろそれ以上に愛してほしいという願望。ユー君は優しいからそんなことはないと思うけど、子供に夢中になって私の相手を疎かにしてほしくない……そんな困った不安である。

私の言葉を聞いたユー君は少し驚いた様子の後、肩を震わせて笑い出した。

「な、なんで笑うの!？」

いきなり笑い出したユー君に思わず顔を寄せる。

私はこんなにも悩んでいるというのに、そのユー君がこんなに笑うなんてどういこうとだ。少し強く顔を寄せた私の心情を察したのか、ユー君は優しく私を見つめながら口を開くのだった。

「いや、ごめんな。なんだアイ、俺が子供に夢中になるって嫉妬でも？」

「……うう〜！」

ストレートに嫉妬と言われたことで私は恥ずかしさのあまり顔を伏せる。そうです

よ、そうです！ 私は大好きなユー君が子供に夢中になって私の相手をしてくれなくなるかもしれないって思ったんです〜！ 自分の子供に嫉妬してしまうような最低な母親なんです！ ……ああ、自分で言つてて悲しくなつた。

ユー君の顔が直視できず俯いたままの私、そんな私の耳に届くユー君の言葉。

「まだ子供ができる感覚は分からないけど、知り合いの話とか聞く限りまあ夢中になるだろうなあ」

それはそうだと思う。

ユー君の言葉のように自分たちの子供というのは特別愛おしく感じるそうだ。これは友人が言つていたことだが、姉や兄が結婚し子供ができて、家に連れてきて騒いでいることに対し鬱陶しく思つてはいても、いざ自分の子供ができた時その価値観が一気にひっくり返ると私は聞いた。

当時の友人の話を思い出していた私、そうやって気を抜いていたからかユー君に引つ張られ、気づけば私はユー君の胸の中に抱かれていた。

「ユー君？」

見上げればすぐ傍にユー君の顔があつた。

私の目を真っ直ぐに見つめながら、こう続けるのだった。

「子供はたくさん可愛がると思う。だつて俺と、そして大好きなアイとの子供だ。こん

なの可愛がらないわけにはいかないだろ」

……同意だ。

私と、大好きなユー君との子供なのだ。そんなの当たり前前に決まってる。

「……子供もそうだけど、アイの存在を蔑ろにするようなことはないんじゃないかなあ……つまり……そのだな」

少しだけ歯切れが悪く、頬を掻きながら照れた様子のユー君に私は首を傾げた。

しばらくそうしているとユー君は諦めたのか赤くなりながらも言葉を続けた……その言葉はおそらく、ずっと私の心に刻まれ残り続けるであろう言葉。

「こんなに好きなんだ。好きで好きでたまらない、そんな嫁さんを俺は蔑ろにはしないよ」

好き……たったそれだけの言葉なのに私の心は嬉しさという感情が溢れ出す。

目を真っ直ぐに見つめられ伝えられる言葉だからこそ、それは私の脳を犯すように甘く入り込んでくる。ゆっくり優しく頭を撫でられる感覚も手伝って、ユー君の存在しか見えてこない。

「今も昔も、そしてこれから俺はアイにずっと夢中だよ」

そう言っただけは抱きしめられた。

……ああ駄目だ。こんな幸せを味わうと抜け出せるわけがない。抱きしめられる中

で、私はさつきまで不安になっていたことが馬鹿らしくなった。ユー君はこんなにも私を想ってくれている、だということに不安になってしまふなんてそれこそ失礼じゃないか。

『パパ！ ママ！』

『おうパパだぞ〜』

『は〜い、ママですよ〜』

ユー君と私、そして生まれてくる子供で彩られる幸せな未来……それはしつかりと想像できて思わず私は笑みを零す。ユー君と一緒に子供と生活をし、その子供が私たちを求めるように手を伸ばしてくるような愛らしさ……ああもしかしたらこれが自分の子供を愛おしく思う感情なのかもしれない。

「ねえユー君」

「うん？」

「この子が生まれたらさ。きつと今よりももっと幸せになるよね」

「そうだなあ。きつと」

膨れたお腹を撫でるように、私は来るであろう未来を夢見る。

大好きな人と共に家庭を持ち愛おしい我が子を可愛がる、それはきつと何よりも幸せで満ち溢れた日々なのだろう。それを想像すると自然と頬が緩み、胸が高鳴ってしま

う。

「……元気に生まれてきてね。可愛い私たちの赤ちゃん」

トンと、私の声に応えるようにお腹の中で赤ちゃんが動いた気がした。

「……可愛い……なあ……ママですよ……すう……すう……」

「……幸せそうな顔しちやつてるねお姉ちゃん」

「本当ねえ。きつとユ一君との間に生まれた赤ちゃんの夢でも見てるんじゃないかしら？」

「赤ちゃんって……まだユ一さんとお姉ちゃんは高校生なんだけど」

「いいじゃないの。女の子はいつでも夢見るものなのよ。私だって——」

「お母さんはもういい年だよね」

「何か言った？」

「……いいえ何もいっておりませんですはい」

「よろしい」

ぐっすり眠っているアイ、それを見つめながら言葉を交わすアイの妹と母親。

そんな中、耳元に置いてあったアイのスマホが震え、そのせいかアイは目を覚ました。まだまだ夢心地のせいか目元をこすりながらだったが、そんなアイの寝ぼけていた頭もスマホを見た瞬間一気に覚醒した。

「……えっ!？」

「な、なに?」

「どうしたの?」

いきなり驚いた様子のアイに妹と母親は揃って首を傾げ、そして固まっているアイの左右を陣取りスマホを覗き見る。

そこにあつたのはユーからのメッセージ、書かれていた内容は次である。

『……姉の告白現場に遭遇、俺はどうしたらいい?』

そんな文面だった。

そのメッセージを見た反応三者三様であった。

「え? どういうことなの!？」

「うっそ本当に!?! ユーさんのお姉さんついに!?!」

「あらあらまあまあ!」

上からアイ、妹、母親である。

母親が立ち上がりキッチンに向かった行動が少し疑問だが、今は気にしている暇はな

い。驚きのあまり固まっているアイと妹はとりあえず座ってはどうかとソファに腰を掛ける。

「とりあえずユーさんに電話してよお姉ちゃん」

「そうだね、旦那様に電話を……」

「旦那？」

「……はっ!? ううん何でもない! ……つてあれ、ということはある……? あの素晴らしき日々は夢!? ユー君は? ユー君と言う名の愛おいしい旦那様は? 可愛い私たちの子供は? 全て夢だと言うの!?!」

「お、お姉ちゃんがご乱心!?!」

翌日、泥棒でも入ったのかと近所に心配されたそうなの。

それほど騒がしかったようである。

本編とは関係のない話 双子編

人の変化とはすぐには気付かないものだ。

もちろん見た目に関してはすぐに分かることではあるがその人が持つ内側、内面の変化に関しては普通気づかないものだと思はう。

だからこそ、俺は今の現状に困惑してしまっている。

「あなたが好きなのよ」

「あなたが好き……っ！」

全く顔の同じ双子が俺に告白してきたのだ。

目の前の双子とは物心付いた頃から一緒だった。何をする時にも一緒で、この三人の誰かが欠けている時などなかったしこれからもその瞬間は絶対にない、そう言い切れるほどには俺たち三人の仲は良好だった。

ずっと仲が良かった俺たち、ずっと友達でいると思っていた俺たち……だからこそ、俺はその友達という垣根を超えようと言わんばかりの双子の告白に困惑しているのだ。

「ふふ、困ってるわねやっぱり……でも、そんな顔もやっぱり可愛いわ」

「……うん。可愛いよ」

俺の困惑顔に何を思ったのか可愛いなどと言ひ出す双子。その指摘に恥ずかしくなつて目を泳がせてしまつたのが更にツボにハマつたのか双子はクスクスと笑うだけ。俺はそんな双子の様子にムツとしてしまつたが、その俺の反応さえも彼女たちは愛しい者を見るような優しい眼差しを向けるだけだつた。

正直とても調子が狂う。けれどだからと言つて今この状況が好転することではなく、ゆっくりと時間は過ぎていくだけ。けれど正直、俺が彼女たちに告白されたことは嘘ではなく真実……故に俺はそのことに関して口を開く他なかつた。

「……えつと……冗談ではなく、本気なのか？」

俺のその言葉に、双子は即答だつた。

「もちろんよ。あなたが好き。この気持ちは本物よ」

「もちろん……あなたが好き。私も本気だよ」

双子の目は紛れもない本心を語る物、嘘偽りのない本物の好意だつた。

彼女たちの言葉を聞き、俺はゆっくりと双子を見つめる。俺のその目線に彼女たちは頬を赤らめ少し照れくさそうにするが、それでもいつも見せてくれる笑顔を隠すことは決してしなかつた。

彼女たちは幼馴染、けれどそういう関係になればと考えなかつたことはない。今はもう高校生にもなつて恋愛にも興味がかなりある年頃だ。学校でも彼氏がいる人、彼女

がいる人を見て羨ましいと思ったことだつてももちろんある。好きになった女性と一緒によくのことをしてみたい、そんな関係になりたいと考えたのはいつだつてこの双子たちだつた。

ずっと一緒にいたとはいつても、成長していく彼女たちを見て段々と女性として意識していく。少女から女性への成長を示すように可愛いと思つていた顔立ちは美しくなり、平らだつた胸はたわわに実り……このように挙げればキリがないが、彼女たちはもう立派に大人の女性へと近づいていたのだ。

些細なことでもドキドキしてしまい彼女たちの存在を大きく感じてしまうこの感覚、もしかしたらこういう気持ちを抱えている時点で俺も同様に恋をしてしまつていたのかもしれない。

「……………」

双子に告白されたこと、己の気持ちを理解した今となつてはそれはとても嬉しかった。願わくば俺の方から気持ちを伝えたかつたなどと考えはしたが、もう告白されてしまった身となつてはそれは過ぎたことである。

「……………」

「……………」

黙り込んだ俺の返答を待つように、双子は口を閉じて俺を見つめながらジツとしてい

た。

彼女たちに気持ちに応えなければ……そう考えるのだが、ここで俺は一つの事実に気付く。それは俺がこの双子のどちらかではなく、どちらも好きなのだというものだった。それも当然で、俺にとつて彼女たちは二人揃つて大切な存在なのだ。どちらかに優劣なんてなく、どちらにも傍にいて欲しいという願ひがある。もちろんこの考え方は許されない物であり、ハッキリさせなければいけないものであるということとは理解している。理解しているのだが、やっぱり俺には彼女たちのどちらかを選ぶという選択肢は選べそうになかった。

「俺は……」

「ここから続く言葉はおそらく永遠に出てこない、俺は直感でそう感じた。

答えが出せず、ハッキリしない俺に対し双子はどのような言葉を掛けてくるだろうか……悩みに悩み抜いていた俺の心を察してなのか、双子が口を開いた。

「ねえ。どうして私たちが一緒に告白したと思う？」

「……どうして分かるかな？」

「……確かにそれについては分からない。

答えが出せない俺の元に歩み寄り、左右から抱きしめるようにその身を寄せながら双子は口を開いた。

「きつとあなたは優しいから、どっちかなんて選べないと思ったわ。そしてそれは私たちも嫌だった」

「うん。私たちは三人で一緒だから。私たちどちらかが選ばれて、どちらかが身を引くのも嫌だった」

『だから』

彼女たちは言葉にする。

同時に告白した意味を。

「私たち二人をあなたの彼女にしてほしいと思ったのよ」

「そうすれば三人とも幸せになれる。誰も泣かない方法」

二人を彼女にする、つまり二人と同時に付き合うという選択肢を彼女たちは考えていたのだ。確かにその方法が許されるのであるならそれが尤もいい方法なのだろう……けれども今のご時世、そんな在り方は絶対に肯定されない。絶対に、確実に世間に否定される在り方。

「もちろん、これが一般的にはダメなものだって分かってるわ。それでも私たちはこの方法を取ろうと決めた。愛するあなたと共に、大切な半身であるこの子も一緒になるために」

「我儘だって、簡単なことじゃないって分かっている。それでもこの方法を取りたいの。」

愛するあなたと共に、大切な半身のこの子も一緒にいるために」

生半可なものではない、絶対にそうするのだという覚悟を双子は既に持っていた。

双子は俺から離れ、大きめのベッドに向かう。そして――。

「ちよっ!?!」

双子はほぼ同時にスカートを脱いだのだ。

スルツと綺麗にスカートは脱げ落ち、健康的な素足が露になる。意識しなくても、魅惑的なその光景に自然と視線が固定されてしまう。

更にカッターシャツの胸元ボタンを外すことで、窮屈に押し込められていたたわわな胸がその谷間をくつきりと見せつけるように現れた。

双子はベッドに座り、互いに体を寄せ合う。

互いの体の距離が0になったことで、お互いの胸がお互いの胸に潰されるようにむにゅりと歪むその光景はとても官能的だった。体を寄せ合った双子は俺を見つめる。その目は男を誘うサキュバスのよう、情欲を駆り立てられ双子しか見えなくさせてしまうような不思議な力を放っているようにさえ見える。

「私たちを愛して。強く、激しく、あなたという存在を刻み込んで……っ!」

「私たちを抱いて。体の奥深くまで、あなたの物だと証を刻んで……っ!」

もしかしたら、この場に来た時点で後戻りはできなかつたのかも知れない。

双子を前にして、俺の取った道は――。

先輩と後輩ちやんは歩き出す

初めての出会いは何んてことはない、会社に居れば何度でも目にする新入社員の挨拶だった。

『初めまして！ 今日よりみなさんのお世話になります！ よろしくお願いします！』

元氣な奴が入ってきたなど、当時の俺はそれだけを感じていた。社会の厳しさというのをまだ知らない、そんな無垢なイメージも抱いていたかな。とにかく最初の出会いは特に変わりはなく、俺は彼女——後輩に関して当たり前のことだが特別な何かを抱くことはなかった。

とにかく礼儀正しい、おまけにスタイルも良く美人ということもあって後輩は男たちから注目されていた。仕事をする中で色々遊びの誘いであつたり仕事の後のご飯だったり、結構誘われてはいたが後輩がそれに頷くことはなかったのだ。とにかく彼女はガードが固かった。

特に絡みはなかった……でもいつからだろうか、俺が後輩とよく話をするようになったのは。

『先輩！ これ教えてください！』

いつの間にか先輩と呼ばれるようになって、仕事に関して多くのことを頼られるようになった。

後輩は物覚えが悪いとかそういうことはなく、一度教えればすぐにできるようになるほどには賢い……ただ物凄くドジっ子ではあったが。まあそのドジな部分も後輩のことを知っていけば知っていくほど、愛嬌というか可愛い部分というか……なんとなくそんな風に感じるようになっていたのだ。

『私思うんです。先輩と会えて、本当に良かったなつて』

ふとした時に、ドキツとするようなことも言ってくれて慌てたこともある。

その都度何言ってるんだとそっぽを向いて誤魔化したりしていたが、それが照れ隠しということにおそらく後輩は気付かなかっただろう。こんな誤解させるような言葉を言うくせに、後輩はとんでもなく鈍感なのだから。

過去を振り返り後輩との出会いから今までのことを思い返せば、本当に後輩と過ごしたたくさんの記憶が蘇ってくる。その記憶は決して嫌なものではない、むしろ心地よく温かったものだ。会社で働くにあたり、特に代わり映えのないと思っていた日常に突如現れた変化を及ぼす存在……後輩の存在は俺の生活に間違いなく影響を与えた。

「……………」

そしてそんな多くの時間を超えて訪れた今という瞬間、俺は後輩に告白をされた。

「……好きなんです。先輩のことが……好きで好きで仕方ないんです！」

頬を真っ赤に染め、涙を浮かべながら後輩は俺に言葉を紡いだ。

いきなりのことに頭が真っ白になってしまふほどの衝撃を受けたが、流石に聞き取れなかったからもう一度言ってくれとかそんな言葉を吐くつもりはない。告白というのは大なり小なり勇気というものがある……後輩は勇気を振り絞って俺に好きだと伝えてくれた。

後輩の気持ちは……ああもう、正直に言おう。

——とても嬉しい。

そう、俺も分かっている……ずっと前から俺もきつと好きだったのだろう。恋をしていたのだろう。目の前の彼女に、俺は間違いないと好きだという感情を抱いていた。

今回のことに関して一つだけ残念だと思うのは、やっぱり告白は俺の方からしたかったということだろうか。結局それも変化を恐れたヘタレである俺の責任ではあるが、それでもやっぱり後輩に俺から気持ちを伝えたかった。

「……はあ」

小さなため息を一つ、他意はなかったが後輩にとって俺のため息は別の意味に見えたのかもしれない。

「あ……先輩……私……」

ポロポロと涙を流す後輩の姿があった。

別に俺はエスパーというわけではないが、どうしたことか後輩の心の動きがこれでもかとわかってしまったのだ。少しの誤解に悲しむ後輩の姿に、俺は場違いなものだが言いようのない愛おしさを感じた。だからこそ、本当の意味で気持ちを感じ、後輩にはずつと笑っていてほしいと密かに思い続けている俺なのだ……後輩にそんな泣き顔をさせ続けたくなくて、俺は後輩に近づきその体をゆっくりと抱きしめた。

「っ!?! せん……ばい……?」

震える体、同時に触れたことで体温を感じる後輩……俺は後輩の頭を撫でながら口を開く。

「俺から伝えたかったんだけどな。やつぱりこういう告白するのは男からしないとダメだろ」

「…………ふえ!?!」

このご時世にふえなんて驚き方をする奴がいるとは驚きである。けれどまあ、その反応はとても可愛かった。おかしいな、俺は心の中とはいえあまり恥ずかしいセリフを言う人間ではなかったはずなのだが、それほどに今の俺は後輩に対して愛情を感じているということか。

後輩を抱きしめ少しだけ落ち着くのを待ち、そして俺は伝えるべきを口にす

のだった。

「俺もお前が好きだよ。これからの人生、共に歩いてほしい……つて、流石にこれは早かったかな」

「……っ!!」

くしやりと後輩の表情が歪み、次いで止めどなく涙が溢れてきた。後輩は間違いなく泣いている、泣いているというのにその顔はどうしようもないほどに緩み切っていて……本当に嬉しそうにはにかむ笑顔だった。

「早くなんかありません……私は全然バツチコイです！ だから先輩、これからも私の傍に……今まで以上についてくれますか？」

その後輩の問いに俺は頷き改めて抱きしめるのだった。

「もちろんだ。約束する……お前も、俺の傍にいてくれるか？」

俺の問いかけに後輩は強く頷き、更に俺を求めるように背中に回した腕に力を込めてきた。

「はい！ 末永く、よろしくお願ひしますね。先輩！」

抱きしめられながら、俺を見上げる後輩の顔は今まで見たどんな笑顔よりも奇麗なものだった。この腕の中にある温もり、それを俺はこれからずっと抱きしめ続け離すことはしないだろう……それほどに俺は後輩のことが好きなのだから。

「ねえ先輩」

「うん？ どうした？」

「……キス……してください」

「……ああ」

よく言う言葉だろうけど、後輩との初めてのキスは当然のことながら……涙の味がするのだった。お互いに触れ合うだけのキスだというのに、こんなにも心が満たされるのは生まれて初めての感覚だ。唇を離し、お互いに無言の時間が続く中ふと後輩が呟く。

「先輩、私……もつと先輩と触れ合いたいです。もつと、先輩を感じたいです。……ダメですか？」

……こんなことを言われてダメという男はいないと思う。

けれど場所が場所だけに俺も踏ん切りが付かない……だってここは後輩の家だからな。ユー君がいつ帰ってくるかも分からないんだ。

後輩の潤んだ瞳に見つめられながら俺は迷い続ける、そんな中俺のスマホが震えた。後輩に一つ声をかけ、確かめてみるとメッセージは後輩の弟であるユー君からだった。

その内容はというと。

『まだ帰らないので、姉さんを頼みます』

そんな短いものだった。

あまりに都合の良すぎるタイミングに俺はびっくりするが、ここは一つユー君の言葉に甘えることにした。

今日この日は俺にとって忘れられない日になるはず、何も代えがたい大切な宝物ができたそんな日なのだから。

「さてと、それじゃ行くとするか」

「うん。家に泊まる？」

「そうだなあ。明日は休みだし邪魔しようかね」

「えへへ、やった！」

自宅の前でスマホをポケットにしまい、ユーはアイと共に歩き始めた。今回の出来事は本当に偶然で、帰ってきた瞬間にユーは告白現場に遭遇したのだ。そこからどうしようかとりあえずアイに連絡を入れ、アイも気になったのか野次馬根性全開で息を切らしながらユーに合流するのだった。

正直姉とその好きな人である先輩の告白のことを盗み聞きするのは失礼かと思っただが、ユーにとって姉は大切な家族なのだ。故に気になってしまい玄関ではなくリビング

の声が比較的聞こえる場所にアイと共に隠れ、そして告白の成り行きを見守っていたのだ。結果は姉の嬉しそうな表情で分かるように、上手くいったことでユーも肩の荷が下りた。後はまあ……そういう雰囲気になりそうだったので先輩に帰らない旨のメッセージを送ったというわけである。

アイの家に向かうため、暗い夜道をユーはアイと腕を組んで歩く。

流石に夜が遅いということもあって周りには人がいなく、静寂の空間が広がっている。そんな空間の中で、改めてユーは姉の幸せを嬉しく思い……そしてアイの存在を視界に入れる。好きな人と一緒にいられる、それは本当に素敵なことだとユーは改めて感じた。ジツと見ていたことが分かったのか、アイが気づき首を傾げてきた。

「どうしたの？」

疑問を口にするのと同時に、人間は大体どうしたのかと表情にも表れる。けれども今、アイは確かに疑問を口にしたが表情はとても嬉しさに満ち溢れていた。その理由はなんてことはない、どんな小さな理由があったにせよアイはユーに見つめられたということが嬉しかったのだ。

アイの笑顔は可愛くて、そして何よりユーにとつても心を満たしてくれる笑顔。ユーは思わず笑みを浮かべアイに囁くのだった。

「好きだよ。アイ」

いつも伝えている言葉ではあるが、やはり言葉で伝えるということはとても素晴らしいことだ。嘘偽りのない心のからの言葉、それを聞いたアイがユーに返す言葉はもちろん、アイがいつもユーに対して抱く素直な言葉。

「私も好きだよ。ユー君」

道のど真ん中だというのに、思わずユーがアイを抱きしめたのは言うまでもなかった。

ユーの家からアイの家まではそんなにかからない、でも二人が家に着いたのはかなり時間が経ってからだった。家に着いたユーとアイを見て、アイの母親が頬に手を当てて「あらあらまあまあ」と楽しそうに呟く……まあそういうことがあったというわけだ。

「……うう、外でだなんて変態さんだよお」

「流石に済まなかった。でも一つだけ言わせてくれ、アイが可愛すぎるのがいけないんだ」

「もう!! ……ま、まあ私も思いつきり求めちゃったしおあいこだね」

「お姉ちゃんたち……何話してるの?」

「あなたもそのうち分かるようになるわ。でもやっぱりアイは私の娘だわあ。私も若い

頃は――」

本日もアイの家は賑やかだ。

アイちゃんと買い物

女性の下着売り場、いつ来てもこの場所に慣れることはない……いや、男の俺が慣れちやいかんだろうと思うのだが正直に言おう。俺、幼馴染のせいでこの感覚に慣れちやいそうです……。

事の発端は一昨日、妙に胸元を苦しそうに抑えるアイを見たのが原因だった。いやね、この非常に胸が豊かな幼馴染と過ごしているとあれだ。そういうことに気づけるようになるわけだよ。

『……また大きくなつたん？』

『たぶん……ちよつと苦しいかな』

なんて会話があり、そこからこうしてアイの新しい下着を買うことが決まったわけだ。

試着とかサイズ合わせとか、その他諸々のことを俺の与り知る所ではなく、アイは店員さんと共に試着室の中で何やら色々格闘中だ。アイの鞆を肩に背負い、することがないのでスマホを弄る俺は周りの人からどんなふうに見えているのだろうか……うん、あまり考えたくない。

「お客さん確かまだ17歳ですよね？　それで3桁って……別に太っているわけでもないのに色々卑怯じやありませんか？」

「……言わないでください。正直肩凝り凄いですからね？」

「ある人はそう言うんです。ない人は決して言えない言葉なんです」

「ええ……」

店員さんの呪詛を吐いてそんな声とアイの困惑した声が聞こえる。ああそう言えばアイのサイズって確か3桁の太台に乗ったんだっけ。バレー部ちゃんとアイのお母さん、妹ちゃんが3桁到達おめでどう会みたいなの先日やってたなあ。当人のアイの目は死んでたけど。

「……これも遺伝か」

あの母にしてこの子ありってやつだと思う。お母さんはアイを上回るし、妹ちゃんは流石にアイに及ばないがそれでも十分大きい。バレー部ちゃんが死んでもいいとさえ思える楽園らしい……まああいつは少し行き過ぎてるだけだけど。

つと、そんなことを考えているとやつと試着室からアイが出て来た。

「お待たせユー君。店員さんが選んでくれたこの二つ、どっちがいいかな？」

数ヶ月前に来た時は照れながら俺の意見を聞いていたのに、今となつては照れることなく当たり前のように俺に聞くあたり、随分と俺たちの関係も進んだものだなと感慨深

いものを感じる。

アイが両手に持つ下着をそれぞれ見てみる。

片方は大人しいデザインで、もう片方は少し刺激の強いデザインだ。どっちがいいかと言われると……少し無責任かもしれないがどっちもアイに似合うと思う。だからこそ、俺は特に迷うことなくこう伝えた。

「どっちでもアイに似合うと思うけど」

おいこら店員、そこはしっかり言わないとみたいな目はやめろ。ちゃんと理由があるんだ。

「そっちのデザインは可愛いアイに似合うし、逆にそっちだとスタイルが良いからこそ更に大人っぽくなって良いいなあっていう感じなんだけど」

って意見になると思っちゃうんだよなあ。

「……そっか。えへへ、本当はどっちか選んでほしかったけど、そんなユー君のどっちでもいいは嬉しいな」

「いやまああれだ、正直どっちもいいんだよ。どっちもアイに似合うと思ったから……可愛いしエロいしー！」

「最後は余計！ でもユー君がそう思ってくれるのは本当に嬉しい……だから大好き」

「……………」

……上目遣いの不意打ちにはいまだに慣れない、てか店員さんも何鼻押さえてんだよ。

「やっぱあんな良いスタイルになる秘訣は彼氏か、彼氏なの!? くうくう妬ましい! 妬ましい!!」

聞こえてんだけど店員さん……。

それからアイが手に取っていた下着を両方買うことに決め、レジに行つたのだが……まあ何だ、何で女性の下着ってあんなに高いんだろうか。

「お客様のサイズですと些か値が張りますが……」

そう言つて見せられた会計は下着……ショーツもセットとかではなくブラの二点なんだけど、諭吉さんが二人に届くか届かないかである。男の下着とどうしてこんなにも違うのか、おそらくは一生掛かっても分からない世界の神秘だろう。

当然のことながらアイはこれくらい値がするとは思っていたらしく、まあ当然かと言わんばかりの顔だ。先日バイト代もらったばかりって言つてたしそのお金で買うのだろうか……うん、ちよつとは日頃のお返しはしておこう。

「はい」

「……ええ?」

アイがお金を出すよりも早く、俺は自分の財布から2万を取り出してレジに置いた。

姉さんが結構多めに毎月小遣いをくれるから余るんだよ。もちろんアイとのデートとかでお金は使ってるけど、それでも余るって姉さんがかなりの羽振りの良い会社に勤めているのがよく分かる。当初はもらい過ぎだと言ったのだが、家事とかしてくるからそのお礼も兼ねているらしい……そんな姉さんの気遣いは本当にこういう所では助かる。

アイが出そうとしていたバイト代を財布に押し戻し、早々に会計を終えて店を出た。すると当然のことだがアイがこう聞いてきた。

「……なんだか悪いよユー君。お金返す——」

「だからいいってば。ただでさえ使う予定のないお金だったし、アイの為に使うなら俺自身満足だよ」

「でも……」

「……ああじゃああれだ。普段弁当とか朝早く起きて作ってくれるし、最近は夜もよく作りに来てくれるじゃん？ そのお礼も兼ねてってことで納得してくれ」

それでも納得しないアイだったが、暫くすると溜息を吐いてようやく分かってくれた。

「うーん、なんかモヤモヤする……!」

「じゃあそれ着たら一番最初に俺に見せてくれ」

「……もう。でも分かった。ユー君に一番に見せるね……まあ、ユー君しか見せる相手なんてないけど」

そんなやり取りを経て、夕飯の買い出しを終えてアイと一緒に少し暗くなった帰り道を歩く。

アイはがっしりと俺の腕に抱き着くようにしているため、必然とアイの成長した胸の感触がダイレクトに伝わってくる。周りに人が居るといつまで経っても少し恥ずかしいものだが、アイの幸せそうな表情を見ると離れてくれなんて言えるわけもなく……というかこの感触を手放したくなくて人が居ようが居まいが決して言うことはないだろうってのが本音である。

「そう言えばユー君、もうすぐ修学旅行だね」

「言われてみれば確かに。高校生なんだから外国くらい行きたかったなあ」

「あはは、まあそれは仕方ないよ。京都でもいい所はたくさんあるってきつと」

そりゃ普段行くことのない場所だから新鮮な物はたくさんあると思う。何だかんだ、楽しみにしている自分があるわけ。

「いっぱい思い出作ろうね?」

「そうだな」

アイとならどこでも楽しい思い出が作れるだろう。今から本当に楽しみである。

「部屋に遊びに来てよ」

「……いや、流石にそれはマズいのでは」

「隠れれば大丈夫だから！」

「どこに!？」

「……えつと……そう！ 私の布団の中！ もしくは襖！」

「よくラノベとかで見る光景だな！ 現実ではダメだろ！」

「……うう。やっぱりダメかあ。ユー君とイチヤイチャしたいのに」

「イチヤイチャするだけなら今からでもできるだろうに」

「も……もうユー君ったら！」

何を想像したのか顔を赤くしてポカポカと叩いてくるアイ。

そんな中、スマホがメッセージの着信を知らせたので見てみると、案の定姉さんから

遅くなるからご飯は食べて帰ると言うものだった。

「あ、お姉さん遅くなるんだ」

「みたいだな」

「ふくんそつかあ。ユー君は夜どうするの？」

「まあ簡単に作って食べ……？」

「……（ソワソワ）」

「……お邪魔していい?」

「うん!! どうぞどうぞ!!」

……姉さんの帰りが遅くなる時、アイの家に行くか逆にアイが家に来るか、結局このどちらかになるのはもうこれからずっと変わらない日常的一幕なんだと思う。

これからもずっと大切にしたいと俺は改めて思うのだった。

ところで、どうやらアイの家には肩もみ序列なるものがあるみたいだ。簡単に言うとアイの家系は非常に胸が大きい遺伝子があるせいかな、そのせいで肩が凝るのも頻繁なのである。だから家族そろって列になり肩を揉む、それが肩もみ序列なのだ。

俺の目の前で先頭にアイのお母さん、次いでアイ、最後に妹ちゃんの順で肩もみの列が出来ているが……まあこの順番だと不満が出るのは当然なわけで。

「うがあああああつ! 私だけ損してるじゃん! 二人ともズルい!!」

……まあ当然だよな。

なので仕方なく、俺は妹ちゃんの後ろに座って肩に手を置き優しくモミモミするのだ。

「あ……ふあ……ユーさん、凄く気持ちいい」

姉さんも良く肩が凝るからな。どこが良く効くかは分かっているつもりである。そんな風に妹ちゃんの肩を揉んでいると、アイから恨めしそうな視線が飛んでくるわけ。

「……羨ましい」

「へへ〜ん。お姉ちゃんは私が揉んであげるから大人しくしてね？」

「……うう〜っ!!」

「あらあら」

妹ちゃんがドヤ顔して、アイが悔しそうにして、お母さんが楽しそうに笑っている。傍から見ても楽しい光景だ。……誰もいらぬことを言わなければな。

「本当に気持ちいいです。ねえユーさん。これからも私の揉んでくれませんか？」

「……ちゃんと肩を付けような。誤解されそうだから」

「ふふ、何を誤解されちゃうんでしょうか」

妹ちゃん、完全にアイをからかう気満載である。そして案の定アイは釣られて自爆するのだ。

「肩もおっぱいも、ユー君が揉んでいいのは私だけなんだからね!」

「……お姉ちゃん、そこまで言うんだ」

「……はう!？」

「うふふ。若いっていいわねえ〜♪」

今のアイの声大分大きかったけどお隣に聞こえてないよね？

俺またお隣さんに微

笑ましい目で見られるのは恥ずかしいぞ……。

そんなこんなで、またまた賑やかな夜が過ぎて行くのであった。

すまん
♡

突然だが、俺にはグラビアアイドルの幼馴染がいる。

まだ高校生という若さではあるのに、大人顔負けのプロポーズを惜しげもなく披露し、世の男の心を鷲掴みにしている幼馴染だ。昔はずっと一緒に遊んだりして過ごしていたのに、最近になっては撮影の仕事が忙しいのかそういつた時間を作ることはあまりできなくなった。まあ男女という関係上、高校生にもなって二人で遊んだりする関係というのもそうないか。恋人だと言うならまだしも、俺とあいつはそう言った関係ではないのだから。

「……雑誌か」

学校帰り、コンビニに立ち寄った俺の前にあつたのは一つの雑誌。ただの雑誌なら見向きもしないのだが、表紙を飾っている女性が俺のよく知るあいつ——幼馴染だったため足が止まってしまった。

あまりこういった雑誌を手取ることはないため、少しばかり緊張しながら雑誌を手を持つ。大きく書かれているキャッチフレーズは「人気急上昇中、あざとさを兼ね備えた話題の美少女、ハジける日乳」なんて言葉だ……正直身近な幼馴染を指す言葉がこん

な言葉だと少しだけ複雑に思ってしまう。

「……H乳……ああHカップってことか。まああいつ巨乳だしなあ」

雑誌に写るあいつは水着姿で、その豊満なボディが惜しげもなく晒されている。中学辺りから急激に成長していたのは知っていたがまさかここまでとは……まああいつよく肩揉んでとか言ってきたしな。

懐かしい記憶を思い出す傍ら、ちよつとだけ遠い場所に居るんだなと寂しさも感じてしまう。ただの幼馴染なら特に何を思うでもないのだろうが、憎からずあいつのことを想っているからこそこんな気持ちを抱いてしまうのだ。

グラビアアイドルとして雑誌に載るたびに、買ってと学校で言われたりメールで言われたり……でも俺はつい恥ずかしくなって興味ねえからとその話を終わらせてしまう。そのたびにあいつはニヤニヤと笑って俺をからかかって……それが面白くなくて意地になって、結局レベルの低い言い争いに発展してしまうのだ。本当はあいつをよく知る一人の幼馴染として、凄いいじゃんって言いたいのに。

暫くボーっとしていたせいだろうか、今になって俺は店の外から誰かがガラスをコンコンと叩いていることに気づく。一度でもコンビニを利用したことがある人なら分かると思うが、雑誌を置いてある場所の裏は基本中と外を隔てる一枚のガラスが設置してある。そうジロジロ見てくる人はいないが、簡単に言ってしまうと店の外からはパツ

チリと見えるのだ。

……さて、どうでもいいことを長々と述べたがここに来て俺は漸く何なんだと思ひ雑誌から視線を上上げた。俺が視線を上げた先に居たのは一人の女性、ニヤニヤと笑みを浮かべながらそこに居たのは……。

「……………んっ!?!」

周りのお客なんてなんのその、俺は驚きで声を上げてしまう。

俺の視線の先に居た女性、まあお分かりだろう。今俺が見ていた雑誌の表紙を飾っていたグラビアアイドル、幼馴染その人だったのだ。

あまりに急な幼馴染の登場に頭が真っ白になった俺、そんな俺の耳にメッセージの受信を告げるスマホの通知音が届く。ほぼ無意識にスマホを取り出し確認すると、送り主は目の前の幼馴染で書いてあった言葉はこうだった。

『あれ〜? 興味ないんじゃないの〜?!』

いつも聞くようなからかう声音がそのまま聞こえてきそうな文面だった。俺はどう反応すればいいのか分からず啞然としていたけれど、あいつは隣に居たマネージャーに腕を引っ張られて歩いていく。段々と距離が離れる中、あいつは最後に俺の方に振り返ってウインクを一つして去っていった。

「……………」

突然のことに付いていけなかったが一つだけ、あのウイंकは可愛かったなと思うのだった。

突然だが、私には幼馴染が居る。

幼いころからずっと一緒に居た大切な幼馴染だ。最近はずらびアアイドルの仕事が思いの外忙しくて二人っきりの時間が取れないけれど、少しでも会えるだけでその日を笑顔で過ごせるほどには大好きな幼馴染だ。

好き、大好き、この気持ちは嘘じゃない。私はあいつが好きで好きで仕方ないのだ。素直に気持ちを伝えればいいじゃんって友達にはよく言われるけど、私だって結構な恥ずかしがり屋だ……あいつ限定で。だからあいつの前だといつてもからかうような言動をしてしまう。

「……あいつ、今何してるのかな」

傍に居ないあいつのことを考えて、私はスマホで時間を確認する。時刻は丁度下校時間と言ったところで、帰宅部のあいつも漏れなく学校から家に帰っている時間だろう。

最近遊べなくて寂しい、家にも行けてないな……なんて思っていると、ふと目に入っ

たコンピニの雑誌コーナーにあいつは居た。隣に居たマネージャーに少し許可を取り、気づかれるだろうくらいに傍に行つたのにあいつは私に気づかない。何をそんなに真剣に見てるのだろうか、そう思つてあいつの見ている雑誌に目を向けて……私は嬉しさのあまり大声を上げそうになつた。

もしかしたら私ではなく別の子かもしれないのに気が早いと思われるかもしれないが、私に気づいたあいつの反応でその懸念も払拭される。あいつは私の写真を真剣に見てくれた……いつも興味ないと言つていたあいつが見てくれた。それが今まであつたどんなことよりも嬉しかった。単純だと笑われそうだけど、本当に嬉しかったんだ。

結局その日はいつも通りあいつをからかうようなメツセージを送つて終わりだったけど、次の日の私は最高に機嫌が良かった。身支度を整えて学校に向かうために家を出ると、お向かいの家から出てきたのは幼馴染のあいつ。

「おっは〜！」

「……おう」

時間が合えば一緒に学校に行くのは当たり前前、自転車を手で押すあいつの横を歩く。そんな中でふと、私はこんなことを口にした。

「ねえ、久しぶりに後ろに乗せてよ」

「はあ？　まだ時間は全然余裕じゃん」

「いいじゃない。偶には乗りたいのよ」

「……まあいいけどさ」

めんどくさそうだけど、私の気持ちを汲んでくれるそんな所が好き。

あいつの後ろに乗って、落ちないようにしっかりと抱き着く。Hカップにまで成長した大きな胸があいつの背中に押し当てられるけど、私は恥ずかしさよりも幸福な気持ちが勝って幸せになる。まああいつは結構恥ずかしそうにしていたけどね。

「……安心してね。こんなことするの、アンタだけなんだから」

「何だって!？」

「ふふ、なんでもなくいい!!」

あいつの後ろに乗って行く通学路、歩いている他の生徒が注目してくる。自分で言うのもなんだがグラドルとしてそこそこ人気になってからこんな視線が増えたのも感じていた。中にはイヤらしい目で見てくる視線もあったけど、あいつに抱き着いていたら嫌な気持ちも全部吹き飛んでしまう——そして。

人気になったからこそ、付きまとう存在が居る——所謂パラッチだ。

マネージャーや所属する事務所の社長からもある程度は気を付ける様に言われているが、私はスカウトされた時に好きな人がいることを伝えているし、何より恋愛は好きにしている。この業界には珍しいがOKをもらっているのだ。だからこそ、私は人並み

の中に見つけたカメラを持った人に笑顔でピースする。

撮りたければいくらでも撮ればいい、撮られて困ることなんて何もないのだから。

パシャつと、小さくシャッター音が聞こえた気がした。

きつとあのパラッチのカメラの中に私の笑顔が保存されたことだろう。グラドルとして浮かべていた仮の笑顔じゃない、好きな人の傍で幸せを噛み締める最高の笑顔を浮かべた私の姿が。

結局その後、あの時の写真は週刊誌に載る形になった。

“人気急上昇の現役JKグラビアアイドル、幼馴染に売却済!?”なんて言葉で。

「おい、お前どういいうことだこれ!」

「幼馴染って言ってたな。うらやまけしからん!!」

「うるせえ!!」

クラスで友達に事の真意を聞かれているあいつを見て、ちよつと酷いかもしれないけどクスクスと笑ってしまった。でもこれで公になったねと、今日あいつにメッセージを送ってみるのもいいかもしれない。

あいつの傍に近づくと、この事態をどうにかしてくれと目で訴えてくるあいつの姿。

でもごめんね、私はアンタが大好きなんだ。でも素直になれないから、だから今日も私はアンタをからかうようにこう言うのだ。

「すまん♡」

でもいつかは届いて欲しいな。

アンタを好きなこの想い。